

SSKO

東腎協

87年10月25日

No. 68

東京都腎臓病患者連絡協議会(東腎協)

事務局・〒161 東京都

電話・

東腎協15周年特集号



昭和五十一年二月二十五日第三種郵便物認可  
SSKO増刊通巻一六一八号(毎週月・水・金曜日発行)  
昭和六十二年十月十二日発行

## リレー・エッセイ

## わが闘病の師

常任幹事 小脇 正夫

透析に入る前後の精神的・肉体的苦痛、とりわけ精神的な苦痛は常人の想像を絶するものがある。それぞれ各様の悩みをへて、現在に至った方々がほとんどであろう。私も例外ではないが、多くの人々に助けられ、励まされ、長いトンネルをくぐりぬけてきた。ま

わりのすべての人たちが、わが闘病の師であった。中でも、私の透析人生の転機を作ってくれた三人の医師について、少しく触れてみたい。

A先生、K大学の有名な内科の先生であるが、実に気さくな方であつた。私のおびえた心をいつもくつろがせてくれた。患者の心を見る目も鋭かつた。小さな私をいち早く見抜いて、透析という言葉を書きただけで動揺する私に、あえて透析に触れようとはされなかつた。時期を見ておられたに違いない。私の妻が、偶然のことから先生の話と直接接する機会があつた。

「透析は最後ではありません。新しい始まりです」

この言葉をきいて妻の目からウロコが落ちた。わが亭主は、透析はすべての終わり、と始終話して

いたから。以後、妻は私が何をいってもオロオロしなくなつたばかりか、逆に私をシツタ激励し、透析を積極的に勧める立場に変わった。一方、私もA先生のお心づかいで、透析への不安感、抵抗感は大次第に薄れていった。将来に何か明るいものが見えてきたためである。

B先生、私はお会いしたことはない。先生の持論を書物の上で読み、感銘を受けた。やはり透析直前のことであつた。文芸春秋昭和六十年五月号の対談「腎臓」と南江堂刊の「これが透析療法です」の二作。この中でB先生が強調された、生き甲斐を求めて働き続けること、わが身を病人扱いする患者意識を捨てること、この二つの持論は、透析に入ろうとする私に、生きる勇気を与えてくれた。B先生は移植推進の立場をとっておられる。私は移植にはなお踏み込めないものがある。そういう立場を越えて、B先生の透析者への深い理解には、単に学問の深さだけでなく、人間全般に対する優しさにあふれている。それが透析する人々を勇気づけているのであろ

う。さらに、B先生の解説書の判りやすさが、透析に対する無用の恐怖感を取り除く啓蒙的性格をより効果的にしている。

C先生、私の透析の主治医である。私には指示されたことを杓子定規に守る教条主義的なところがあつた。たとえば、食塩摂取量を一日三グラムといわれると、その通り順守する。たとえば、そのために食欲が落ちるようなことがあつても……である。C先生はそういう傾向をやんわりと修正してくれた。一日制限を越してしまえば、翌日はひきしめる。「食」といふと、次の一食で調整する。一回一回厳密にやるのではなく、変化をつけていけば、食事もおいしくいただけますよ。自身の問題なのだから……といった具合に。勤め先に徹底した減塩食の弁当を持っていくことも、思い切ってやめた。同僚と談笑しながらの食事がうまいのに決まっている。身につく食事が体にどれほど効果的であることか。

透析生活を円滑にすすめてくれたC先生の役割りはきわめて大きかつた。



## 東腎協会員交流会

## 御岳溪谷でバーベキュー大会

東腎協初の試みである野外での会員交流会は八十八人の参加を得て七月十二日、奥多摩の御岳溪谷で行われました。

朝からの雨にもかかわらず集合定刻前には駅別種の待合室は参加会員の熱気でムンムン。先発隊が出発した後で「やっと爽やかな空気が吸えた」という役員もいるほどでした。

まず駅近くの玉堂美術館の見学です。杉木立に囲まれた同美術館は、日本画壇の巨匠・川合玉堂画



伯の作品・道具・画室を展示したものです。

小河内ダムの放水のため水かさが増した多摩川を右手に見ながら遊歩道を辿ること1kmほどで沢の井ガアデンに到着、いよいよお目当てのバーベキューです。「先生に叱られちゃうワ」「カリウムが上がつちゃう」などといいながらも皆さん結構楽しそうに食べていました。(きつとヘマトも上がっていますヨ)屋根の下には肉・野菜の焼ける煙がたちこめ、眼下の川面には負けじと霧がたちのぼっていました。まさに深山幽谷といった趣です。

食事が済むと一時間ほどの自由行動です。今飲んだ分を汗にしてしまおうとひたすら歩く人、今朝知り合った人と体験を交換するグループと様々です。こうして初対面の人と親しく語り合えるのも私達が共通の病気をもち、互いに助け合っている仲間だからではないでしょうか。

場所を移しての体験交流会は、高橋副会長の挨拶に始まり、竹田事務局次長の巧みな司会で進められました。アリより遅い歩みで高尾山に登り、俺もやればできるんだと自信をもった話、富士山に登ろうと運動療法に取り組んでいる仲間達、手話通訳で聾啞児に感謝されて、「私こそあなた達に励まされてるのよ」と答えた女性の体

験、ご主人の闘病生活の苦しさに死のうと考えた後で皆さんも苦しんだのだから私達も頑張りますと結んだ老婦人。いつもと一味も二味も違う体験発表に湧き起こる笑い拍手はこころなしく建物を揺り動かしているようです。

最後に、酒造工場を見学して帰途につきました。

御岳溪谷

七月の緩雨、緑蔭に落ち去来の水冷ややかにして白雲生ず病友、今朝凜然として集い、深畔の園亭、歓声に満ち

(記・井上)

## 街頭キャンペーン、国会請願など討議

## 東腎協第19回幹事会を開く

東腎協第十九回幹事会が九月六日(日)千代田区神田のお茶の水コミュニティハウスで開催、常任幹事、幹事など四十八人が参加しました。

作成、会員拡大、国会請願署名・募金運動、ブロック別患者会役員交流会について討議しました。

討議の中で、街頭キャンペーンは二カ所では少ない、身近な場所で行ったら参加者も増えるのではないかな、など積極的な意見も出されました。また、国会請願署名・募金についての意見も出されました。

後、議事に入り、①昭和六十二年度上半期活動報告、会計報告②腎バンク拡大街頭キャンペーン、腎移植推進キャンペーン、会員交流会、記念講演会、会旗・会員証の

(記・加藤)



好評を得た医療相談会

## 「相談してよかつた」

### 腎臓病無料検診を開く

八月二日(日)、東京都障害者福祉会館で「腎臓病無料検診(医療相談会)」が開かれました。これは東難連(会長・平澤三吾)が都の委託事業として都民を対象に昭和四十八年度から実施している「無料巡回検診」のひとつとして実施しているものです。

医療相談会は四人の医師(出浦、北岡、佐藤先生(昭和大学藤が丘病院内科)、小坂橋先生(聖マリアンナ大病院小児科))と九人のMSWの協力を得て行われました。

相談は午前十一時から行われ、

東腎協から常任幹事九人と東難連から河村副会長が受付などを手伝いました。今年度は特別の暑さのためか申し込みは二十五人、当日の相談者は十八人でした。相談者の中には、この相談会に

## 多摩・役員交流会開く

### 患者会の拡大、強化など論議

東腎協多摩部患者会役員交流会が九月二十七日、簡易保険青梅保養センターで、十一患者会三十三人の参加を得て行われました。

会では、多摩地区で東腎協の活動をさらに強力に進めたいは、各患者会の拡大強化が欠かせないとの提起に基づいて意見発表が行われ次の諸事項が再確認されました。

常任幹事会の伝達を徹底するために壁新聞を活用すること。また会員拡大では「入会のおすすめ」

来るまでは、毎日のように主人の病氣(ネフローゼ)のことを考え悩んでいたが、先生や役員の方々と相談することで気が楽になり、安心して帰途についた方もいました。

このほかにも相談を受けた人の評判はよく、「こんなに長く(三十分位)先生と話ができる機会がなかった。どうもありがとうございました」とお礼を述べて帰られる方がありました。(草間)

を全未加入者に配布すること。会活動を活発にするにはさまざまな困難はあっても、まず役員が会活動とは何かを勉強する必要があること。

最後に、各患者会の役員の集まりでは会活動上の悩みについて話し合いたいとの要望があり、次回からその方向で努力することが約束されました。

討議終了後、ささやかな料理と飲み物で乾杯し、交流会を終わりました。(記・井上)

## 「腎臓病を考える都民の集い」のお知らせ

東腎協結成15周年記念講演会として「腎臓病を考える都民の集い」を開催します。多くの会員・家族の方の参加をお願いします。

日時 11月22日(日)午後1時30分～4時30分  
 会場 東京都勤労福祉会館ホール 中央区新富1-13-14 ☎552-9131  
 交通 地下鉄日比谷線八丁堀下車  
 主催 東京都、東京都医師会、東腎協  
 内容 シンポジウム、患者体験発表など

## 腎バンクに登録を、 街頭キャンペーン行う



毎年行われている腎バンク拡大キャンペーンが、十月四日(日)全国いっせいに行われました。

東腎協は、十月十八日(日)にも腎移植推進キャンペーンを東京都、東京都医師会、東腎協の三者共催で行う(上野公園)ため、新宿駅、八王子駅頭の二カ所で開催、家族など百五十人余が集まり、道ゆく人に厚生省で作成したパンフと救急パンを配布しました。

腎臓移植の登録制度は、一九七七年(昭和五十二年)六月に腎臓移植普及会が関東地域を対象に始められました。現在では、全国に九バンクがあり、十五万八千七百九十五人(八月末現在)が登録していますが、まだまだ足りません。八王子駅頭では看護婦さん、慈秀病院)による血圧測定もあり、好評を得ました。

## 東腎協結成15周年記念

### クイズコーナー

次の各グループには共通点がありますが、一つだけ仲間はずれのものがあります。さで、その共通点とは何でしょう。また、仲間はずれのものほどれでしょう。

〔例題〕サル、イヌ、ネコ、ネズミ、ウサギ、ウマ

〔例題の答〕共通点は「十二支仲間はずれ」ネコ

#### 〔第1問〕

ライオン、ウシ、イヌ、ヒツジ、カニ、サンリ

#### 〔第2問〕

ススキ、オミナエシ、クズ、ハギ、リンドウ、キキョウ

#### 〔第3問〕

福岡市、広島市、名古屋市、横浜市、川崎市、所沢市

#### 〔第4問〕

栃木県、長野県、山梨県、滋賀県、奈良県、兵庫県

#### 〔第5問〕

西郷隆盛、伊藤博文、岩倉具視、高橋是清、福沢諭吉、夏目漱石

東腎協結成十五周年記念クイズで、出題は、井上慶典常任幹事です。

答えのわかった人は、ハガキに〔第1問〕共通点は○○○○○、〔第2問〕仲間はずれは○○○○○、〔第3問〕以下も同様に答を書いて送って下さい。

出題は第1問から第5問までありますが、1問のみ解答を書いても結構です。多くの人の応募を待っています。

なお、ハガキの余白に68号の感想、身近かなでできことなど書いていただけると幸いです。正解者の中から二十人に記念品をお送ります。応募締め切りは、十二月十五日消印まで。

#### 〈応募先〉

〒161

東腎協機関誌係

## 東京都に対する

### 要請行動

事務局長 森 義昭

東京腎協は毎年七月、次年度の東京都予算編成へ向けて、要請行動を行っております。

今年も、去る七月九日(木)に都庁会議室において、昭和六十三年度予算に関する要請行動を行いました。この要請行動には、職場を休むなどして都合をつけた役員十二人が出席しました。

要請内容は、腎臓病の予防から社会復帰までを含めた「腎疾患総合対策」を基本にしたもので、要請先は衛生局、福祉局、労働経済局、総務局、教育局、養育院になっております。

#### 衛生局への要請

一、腎臓病患者の実態を把握し、東京都における腎疾患総合対策を確立するため、患者代表を含めた対策委員会を設置してください。さらに、腎移植推進対策委員会の設置、広報活動の強化など腎臓提供者確保体制を確立

してください。

二、腎移植推進のため、組織適合検査費用を公費負担してください。

三、特殊疾病医療費助成制度を拡充し、慢性腎炎患者の医療費を公費負担してください。

四、都立総合病院に腎臓病の早期発見から腎移植手術まで可能な、腎総合センターを設置してください。

五、すべての都立病院に腎外来の専門医を配置し、外来透析及び夜間透析を実施・拡充してください。

六、地域病院の整備にあたっては外来透析及び夜間透析を実施してください。

七、大島などの島しよでも人工透析が受けられるようにしてください。

八、乳幼児に対する検尿を完全実施してください。また、学生、勤労者、家庭婦人、自営業者などに對する検尿体制を強化してください。

九、地震、水害、火災など災害時の緊急透析治療体制を確保してください。

東京都における腎疾患対策は、

今回の要請先が六カ所にわたっているのを見て分るように、各局各部各課それぞれ別個に行われている。

腎疾患対策を効果的に行うに

は、検尿による早期発見を始まりに、その患者を生運にわたって一貫した医療体制の監視下に置くことが必要です。そのため東京腎協は「腎疾患総合対策委員会」の設置を求めています。

これに對して東京都は、昨年十月に対策委員会の前段として、「東京都腎不全研究会」を設置しました。この研究会では、腎不全の予防、人工透析、腎移植等について研究・検討が行われ、この九月に報告書が提出されることになっております。今回の要請では、私たち患者代表を含めた「腎疾患総合対策委員会」の早期設置を要請しました。

また、腎移植のための組織適合検査費用について東京都は、全国的な問題だから健康保険適用を国へ要望していくとされています。しかし、現に昨年度国の地方腎移植センターに指定された虎の門病院では、一万六千円の自己負担があ

ります。一方、同じ国の指定を受けた東京医大八王子医療センターでは従来から無料で行っており、不公平があるので早急に東京都で費用を助成するよう強く要望しました。

五項、六項は透析医療供給体制の整備についての要望で、都立病院では透析医療に関して、全部透析患者の1%程度しか扱っていません。最近の透析医療費の引き下げや透析患者の累増で、透析の医療供給体制が逼迫することも考えられ、また、都立病院が取り組むべき重点医療であるという認識で要望しています。

#### 福祉局への要請

一、心身障害者(児)医療費助成の対象を四級まで拡大してください。

二、心身障害者福祉手当を増額し、支給対象を三級まで拡大してください。

三、人工透析患者を父にもつ家庭への児童扶養手当の支給を打ち切らないでください。

四、国際障害者年東京都行動計画については、計画の完全実施ならびに予算化に最大限の努力を

してください。また、災害時の透析医療の確保、腎総合センター建設を計画にいらしてください。

福祉手当は現在一万五百円、十月から一万一千円に増額されることになっています。東京都では今後も予算要求の際、要望に沿うよう努めていくといっています。

児童扶養手当については、機関誌『東腎協』の中で継続的に報告していますが、今回の要請では、①一月に東腎協と行った話合いの内容についてまとめ、また、外部障害者とのアンバランスの問題や内部障害者の認定上の具体的な基準を作って欲しいということを含へ持ち上げていること②都としても本当に困っている方々は、何とか救済出来ないだろうかという観点から引き続き内部でも検討したいという発言がありました。

### 労働経済局への要望

一、透析患者が就職可能な雇用先を確保してください。

七の職業安定所の特別援助第二部

門で相談を受けており、今年三月までの過去一年間に安定所の紹介で、四十七人が就職したことが報告されました。そして、透析患者の就職での問題は、やはり透析時間と就労の時間帯が噛み合わないことで、東京都は今後も企業に対する指導を強化していくといっています。

また、都では重度の障害者の多数雇用事業所を民間との共同出資で設立していますが、その二号企業として昨年十月に東京都ビジネスサービス(株)を設立しました。この採用試験で透析患者が二次選考まで残ったが、最終の十人に入らなかったことが報告されました。

### 総務局への要望

一、心身障害者別枠採用で透析患者を採用してください。また、その受験資格について、年齢制限を引き上げてください。

二、東京都一般職員採用試験の合格者は、透析患者であっても採用してください。

三、地震・水害・火災など災害時の緊急透析治療体制を確保してください。

東京都の受験資格は、十八歳以上二十八歳未満となっていて、この年齢は、障害者の進学状況や就職状況を勘案して、本来高校卒程度の受験年齢が二十二歳未満となっているのを六歳延長して設定している。別枠採用といえども採用後には一般と同様に扱っていくの

で、これ以上年齢を引き上げるのは難しいといっています。

身体障害者の別枠採用では、特別区で透析患者が大量に採用されている一方、東京都では移住者が三人採用になっているものの透析患者は未だに採用になっていません。ネットワークはやはり時間的な問題といいますが、最近では透析時間も短縮化の方向にあり、是非都でも透析患者を採用するよう強く要請しました。

### 教育庁への要望

一、児童・生徒に対する学校検尿による腎臓病の早期発見と、学内での管理予防と予後管理を徹底してください。

学校での検尿は、学校保健法の健康診断の項目に入っていて、都

でも小・中学校では九五%以上、都立高校でも約九四%実施していること。一次で異常のあった子供については、二次検査、さらに異常のあった子供は精密検査をやっていることが報告されました。

東腎協では、腎疾患総合対策の要となる検尿体制と同時に、特に異常のあった子供に対する学校・家庭・医師とが協力して病気の管理ができるような体制を要望しました。

### 養育院に対する要望

一、老人医療センターならびに多摩老人医療センター内で人工透析治療を実施・拡充してください。

多摩については建設時から院内発生患者に対する透析を四床予定しています。一方、板橋では透析療法は行われていません。最近、透析導入患者の高齢化が激しく、従ってサテライト的な医療機関では対応出来ない場合も多くなっています。東腎協では老人医療センターが高齢者透析のセンター病院となるよう、今後重要としています。



窓を開け放して眠っても、暑くて、眠れなかったあの、燃えるような、華やかな夏の日は過ぎ去り、こおろぎの音がすかすかに聞える夜が始まったと思っ  
ているうちに、昨夜などは、夜半に目覚めると、地から湧いているかと思う程に虫が鳴き競っていた。この虫たちも鳴くだけ鳴いて、寒さが来ると死んでしま  
う。でも、虫は死んでも大地の肥料となるのだから、自然の輪

廻は人間の浅知恵では推し計れない巧妙さを持っている。

その点、人間は自然界から生じた動物なのに自然の摂理に反抗して太古から死者を土に還すことをしないで、いろいろなピラミッドやら、古墳やら考えてきたが、何故なのだろうと考えると、やはり、無に帰するものが恐ろしかったのだらうと思わ  
れる。この世に残り、何かを残したいという欲求がある歴史的な遺跡を作る原動力になっ  
たのだと思う。

### 東腎協15年の歴史 の中で思うこと

今回の東腎協十五周年記念号はそのような大変な年ではないが、やはり、東京の透析患者が、十五年間、どのように、社会の中で生きてきたかを残し

たいという強い気持があったことは確かである。そして、その軌跡が今までの会報機関誌である「東腎協」の誌上にどのように残されているかを確認したいという思いもまた、編集委員全員の胸にあつたと思う。

去年の秋頃から十五年誌をという心積りはあつたようであるが、具体的に常任幹事会に討議事項として出てきたのは昭和六十二年（一九八七年）三月十五日の第93回の時であった。その

時点で、加藤、草間、木村に、新たに井上、鈴木が編集委員として加わり、五名が折にふれ時に会って、編集委員会を開いて、相談を重ねてきた。九月二十四日現在で記録すると、今年度に入ってから、四月二十六日、六月二十一日、七月十九日、八月二十一日、九月十二日、九月二十日と旅行に行ったホテルの夜も皆が眠っている次の間で、編集委員だけ、会議を開いたりして、不評をかったりしたこと

もあつた。今後も全員出席ではなくとも、発行までには校正や

らで、加藤委員を中心にがんばらねばならない日々が続くこと

だろう。  
そして、この誌面の重要なテーマである、十年・十五年以上の会員氏名の調査にあつた、調査委員の苦勞も並大抵のものではなかつたようである。しかし、これだけの長年の会員がいるというこれは、今後の透析患者にどれだけ心強い支えになるかと思うとその苦勞も報いられたような気がする。

### 編集委員が全員で インタビュー記事

もう一つの重要なことは今まで「東腎協」の大きな魅力のベースだった「会員さん訪問」を拡大した形で、編集委員全員が各々二人の方を受け持つインタビューを試みたことである。筆者にとっても、インタビューを一人でするのは初めてで、前に加藤委員と二人で、「愛の透析」の著者城間美子さんと夫妻をインタビューして以来のことなので、本当に最初はど

たえいのひびく

19

木村 妙子

してよいものやら、頭を悩ましてしまった。

人との対話は余程親しい仲でも時と場所と雰囲気が揃わないと心と心を見せあうような話ほどできないものであるのに、初対面の人と、しかも一時間か二時間の間に何が聞けるのかと思っただが、予備知識を少しでも仕入れておくことによって、いくらかは補えるということを学んだ。

長い期間、しばしば顔を見る人であっても五分と話をしたこともなく、個人的なことにはお互いに何もタッチしないで挨拶だけで人生を通りすぎる間柄もあれば、一年に一度ぐらいしか会えず、電話もかけず、日常に追いつかされていても、心の奥底でいつも、その人に語りかけている間柄もある。

人と人との関係はこのように面白いものだが、今回のインタビューでは、人との出会いのありがたさを実感した。人間て、いろんな人がいるのだということがしみじみと感じられ、おし

やべりな筆者は、やはり、話すつていいことなんだと、思っただけだった。

### リラックスして 話す時の楽しみ

でも、あまり、無意味な、そして、人を傷つけるおしやべりは好かない。最近は何か口にする前に一歩立ちどまって考えるようにしているから、いやな思いをせずに済んでいるけれど、昔は心に思ったことをすぐ口に出してしまつたので、風当たりが

強くて、いやなことを言われたことが多かった。  
傷つけられまいとして、身構えなければならぬ相手と話す時の気遣いは相当なものでありリラックスして話す時の楽しみはよい音楽を聞いた時のように快い。一時、神経の疲れから、人と対話する時、まぶたが、ピクピクしてしまい、顔面がひきつれているのではないかと心配したが、自分で気にする程、人



え・山中 知子

にはわからないものだと思つて心理的なものだから、環境とか気持ちの持ち方を変えれば問題ない、負けるものかと、思つたら治つてしまった。

その頃、東腎協で心身医療をとりあげ、山岡先生の御講演を聞いたりして、透析医学で心の問題に目を向けてくれる医学者もいるのだと思つたことが幸いしたのかも知れない。

今度の十五年記念号には講演記録は載っていないが、会員の読者の方々に、何か、役に立つことが一つでもあれば、努力した甲斐がある。そして、十五年から二十年を目指して、今回、この誌上に掲載された会員各位が欠けることなく、元気に過ごせたらと願う。

透析人数が一九八六年末で七万三三七人になったとのことだが、医療費増大の対策はまた考えるとして、とにかく生き続けましょう。

九月二十四日

東腎協常任幹事

# なかまの たより

会員の皆さんから原稿を募集しています。うれしかった事や悲しかった事、苦しかった事などの闘病記、ひとり言やカット、写真などなんでも気楽に書いて事務局へ送って下さい

## ナイターで 野球を楽しむ

織本病院腎友会

外山 泰弘

東腎協会員の皆様、お元気で頑張ってますか。私達も仲間間の輪を広げて励みます。

ところで今回当センター同好者と計らい、日頃お世話になっているセンタースタッフを中心とする織本野球部に試合を挑戦すべく企画しまして十二人の患者同好者が集まり、その名もチャレンジャーズ（全てに挑戦する人々）とつけ、七月二日（木）午後七時より埼玉県新座市大和田球場でナイター試合を行いました。

院長の始球式で熱戦七回、八対七のスコアで惜敗しましたが、我チームにしては強豪チームと堂々互角に對戦し得て皆大いに自信を深めております。院長始め看護婦の方々、患者の方々とお勢のあたり御支援を受け、楽しい親睦試合だったと思います。皆様共々全てへの挑戦と意



気上がることもありすが、生活の中にも充実した日々、また全ての報恩の気持ちを忘れず歩みたいと思います。野球試合の対戦相手を探しています。御連絡下さい。

（連絡先）

☎0424(91)7886

織本病院センター内、外山宛  
月、水、金午後五〜九時

TELEOK

## 御岳渓谷交流会 に参加して

腎研友の会

鳥津満洲子（家族）

雨の中、大勢の腎友会の人達に参加し、とても患者さんというイメージはありませんでした。皆、自分一人ひとり

体を大切にしているなど感じました。役員の方々のご苦勞は大変だったと思います。

昼食もとてもおいしかったです。健康な私よりもみんな生き生きとよく食べていました。酒造での懇談会は、自分の体験談を話し、私の知らないいろいろな生きよとするエネルギーは並み並みならぬものを感じました。私なんか健康なだけで自分の体を粗末にしているなど感じます。

日帰りでもあんないい所で患者さんと家族との交流もあつたらいなと思います。

役員さんは、ほんとに大変だったでしょう。ご苦勞様でした。感謝します。みなさん、病気にめげず、これからも頑張つて活動して下さい。ありがとうございました。

腎研友の会

原 三代吉

今日は多摩地区で行われる東腎協会員交流会である。御岳駅十時二十分集合との事で我が家を七時に出発。知らぬ

土地に行く時は、多少の時間の余裕を持つての行動は、私の常日頃の心得でもある。新小岩から中央線お茶の水駅に着いた時は雨が降りだし、目的地御岳駅に着いた時には雨足も強くちよつと肌寒さを感じた。

駅待合室では多摩地区の役員の方々、手際よく会員の皆さんの応対をしていた。途中で雨が降つたので雨具を買ひ求める会員の姿も見うけられた。今日は、日頃見かけない会員の方々も大勢参加された様子である。

遊歩道から見渡す御岳渓谷は素晴らしい。山あいから音をたてて流れる清流一すき通つた水の色はあざやかなエメラルドグリーンである。ここが東京都であるとは、とても信じがたい気がする。流れる水面より濃霧のようにに蒸上がる水蒸気が絵を見るように素晴らしい。雨の渓谷も格別である。釣り人も多く、定期的にアユかヤマメではなからうか。歩き始めて四十五分が過



交流会でパーベキューを楽しむ

きたらどうか。交流会の目的地である沢乃井園に到着。昼食には沢乃井園造の地酒を頂き気分爽快。またパーベキューも最高の美味である。その後、酒造を見学。懇談会ではお互いに体験談等の話し合いがもたれ、会員の皆さんが熱心に取り組む姿勢が印象的でした。今回の交流会は楽しく、素晴らしい一日であったと思います。

あけぼの病院友の会

高橋 政時

小雨のちの御岳溪谷の眺めは格別でした。お名前には忘れませんが、ある幹事の方は、自分の生きた証として

して何か残しておきたい、みんなの役にたたくて幹事をやっているといい、それを聞き感動しました。自分も何かしなければという何か証しを残したいという気持ちを起こさせる話でした。

**私達の患者会を紹介します**

森山病院友の会  
森田 肇明

私達が透析を受けております森山病院は、江戸川区西葛西六ノ十五ノ二十四(東西線西葛西駅徒歩二分。南に湾岸道路、東に環状七号線を有り、江戸川区内はちろん他県、区の子民の多大な信頼を得、最良の医療を提供する二十四時間体制の救急病院で、透析者を一日も早く社会復帰への包括的医療を目指し、森山院長先生始め透析室スタッフが日夜懸命にミーティング、研究にと努力をなされ、生命をあずかる透析者にとつては絶対的な信頼と心強さを感じております。

私も会の責任者として、透



析者全員が終つて家に急ぐスタッフの方々には二時間程時間をいただき(夜八時頃まで)種々話し合いをしたこともあり、スタッフと透析者の信頼関係が一番大事であり、良い透析につながるのと点で相互意にしたいわけです。そして、会としても会員相互の親睦を密とし、輪を広げねばと思っております。

森山病院友の会も三年になり、今年は初めて試みる昇仙峡日帰りの旅を企画、スタッフの皆様と院長先生のご後援をいただき(参加者の体調、データを調査)八月三十日

にスタッフの皆様と会員とでマイクロバスにて楽しく旅を致しました。会員の皆様も有意義な一日であり、友を愛し友を信ずる感を一段と感じ、またの機会に一堂に会したいと心に寄せたことと思います。

### 病状近況

個人会員 白井 次郎

家で使っている計量器がどうも甘い。体重より1kgも軽くなる。これじゃ仕方がない。と新しいのにして、今朝計ったら一・五kgしか増えてなかった。水、木、金と三日間も経ったのにこんな筈はないと病院で透析前に計ったら一・七kg増殖した。いつもなら二kg以上も増えて増長に「週三回にしますよ」といわれて首をすくめたのだが、今日は大威張りである。

増えない理由は汗の故だ、このころの猛暑、机の前に座っているだけで背中汗が流れる。

婦長が、「今日は皆さん体重が少ないようですヨ」とい

う汗がこんなに体重に影響するとはとしみじみ思った。待合室での会話

「透析が大変だなんていえた義理じゃないです。ガンの人はもっと大変だから。」

「もつ」とい機械が出来ませんかね。四時間位だなんてわなないで二時間位で済むように。」

私は、お蔭様で四十歳の頃から飲み続けている血圧の降圧剤をいま全然飲んでなくて一六〇/七〇位、透析を始めた頃は二〇〇、「大丈夫です」と看護婦さんにいわれたが別にどうってことはなかった。

時々kgが多くなるが、BU Nも下がったし、CTRもよくなった。U女医が診察、そして「データはベストですネ」といわれて嬉しかった。



## 会員の二割が長期透析者に

東腎協会長 石川 勇吉

東京都腎臓病患者連絡協議会(東腎協)は、今年の十一月十九日で結成十五周年を迎えることになりました。七百人で発足した東腎協は、現在では三千九百五十人の会員を擁しています。

結成当時は、現在と違った医療状況下でありましたが、ある程度の要求が満たされました。しかしここ数年來、経済の低成長下に入るとともに臨調・行革等であり、一口に福祉の後退といわれますが、その一例をあげると、昭和六十一年度の「厚生白書」では、「公的部門による現在(社会保障)のサービス供給体制のままでこたえていくことには制度的、財政的に限界がある」と報告されています。

昭和五十七年度には、老人保健制度(老人医療費に対する一部負担の導入)、五十九年度には被用者保険における本人定率負担の導入、退職者医療制度の創設等を内容とする健康保険法の改正、六十年年度には、年金制度の改革(全国

民に共通する基礎年金の導入による制度の再編成、給付水準及び保険料負担の適正化並びに婦人の年金権の確立等の内容、児童扶養手当における支給対象の重点化等の改革、そして六十一年度には、老人保健法改正案が成立(世代間の負担の公平を図るため一部負担の引上げを行う)しました。

このような医療・福祉の後退の荒波の中でも、私たち東腎協が結成以來から掲げている「いつでもどこでも誰でも透析を受けられる」施策を今後も守り、強化していく必要があります。

十五周年を迎えるに当って、記念講演、会旗・会員証の作成、十年以上の長期透析者の調査をすることになりました。調査の結果、長期透析者は、八百二十三人で実に会員の二割に達しています。今さらにも互いに励まし合ひながら、さらに二十年、三十年とみんなで頑張っていきたいと思ひます。

## 全腎協とともに歩む

全腎協会長 泉山 知威

東京都腎臓病患者連絡協議会の結成十五周年まことにめでとございませう。

全腎協を代表いたしまして、日頃の貴会のご活躍と全腎協の中心組織としてのご協力に對して心よりお祝いとお礼を申し上げます。

東腎協の十五周年は私にとつても大きな意義をもっておりませう。

私は現在でも東腎協の役員の一入です。東腎協結成の昭和四十七年十一月十九日には、十月から透析を始めて入院中のだるい身体を引きずって、大手町の都立産業会館の結成総会会場まで駆けつけました。いわば私の透析歴と東腎協の歴史はオーバーラップしており、私の透析導入後の生活は東腎協や全腎協を抜きでは語れないと考へております。

このように、東腎協の結成十五周年はまことに感慨深いものがあります。全腎協は四十六の都道府県組織より成る協議会です。その中で東京は、もちろん最大の会員を擁する組織であり、首都東京の

会として常に全腎協の中心部隊として活動してきました。

このように東腎協が發展してきた理由は何でしょうか。この十五年間で寺田会長を初代に、石坂宝生、石川現会長と続いてきましたが、ずば抜けた個性の方は少なかつたように思ひます。常に私たちが平々凡々の役員が集まり、みんなで相談をしながら民主的な運営に努めてきました。その結果が現在の東腎協を築き、ここに来てたぐ十五周年を迎えられたのだと思ひます。

ここ数年、医療や福祉にとつては厳しい時代が続いております。私たちは「腎疾患総合対策」を戦略的課題に国民の支持を得られ、かつ、私たちが「医療と生活を守る」ために奮闘してゆかなければなりません。

このなかで東腎協は、常に全腎協の中心部隊として活動していただくようお願いして、東腎協結成十五周年のお祝いのあいさつとさせていただきます。

# 創立15周年を祝つて

東京都衛生局長 沼田 明

今般、東京都腎臓病患者連絡協議会、創立十五周年にあたり、東京都衛生局を代表して、心からお祝ひ申し上げます。

東腎協は、昭和四十七年に腎臓病の患者さんを中心に、療養生活の向上を図るために創立されました。

その後、会長はじめ役員の皆様が、暖かい心の支えとなり、また、療養生活に必要な知識の源となつて、家庭に、職場に、学園に復帰されていることと思います。

この十五年の間、透析患者の皆様にとりましては、東腎協の活動が、暖かい心の支えとなり、また、療養生活に必要な知識の源となつて、家庭に、職場に、学園に復帰されていることと思います。

一方、透析患者数は、現在全国で約七万四千人といわれ、残念なこと毎増加の一途をたどつております。このうち、都内では、約八千四百人透析患者がいるといわれています。

このため、乳幼児検診から学校検診、さらには成人病検診まで一貫した検診体制を整備し、腎臓病

の予防と同時に、早期発見、早期治療をすることによって、透析患者を増やさないよう努力しなければならぬと痛感しております。

東京都では、東腎協の御協力により、東難連へ委託している健康指導事業の中で、昭和五十一年から腎臓病の無料医療相談会を開催しており、これにより、腎臓病の知識の啓発を専門医からの適切な療養指導を行っております。

また、四十七年度から透析患者に対する医療費の公費負担を実施するとともに、五十六年度からは保健所の保健婦により、六十年度からは栄養士を加え訪問相談指導を行っております。

さらに、昨年度から、東腎協の御協力を得て、腎臓病の正しい知識、予防、腎移植等についてのキャンペーンを実施し、都民への普及啓発を図っております。

腎不全対策の推進を図るためには、これらの活動が地域的に相互に連携し、充実していくことが切に望まれます。

最近では、長期透析に伴う合併症の問題等がいわれ、その対策の必要性がせまられております。こうした状況の中で、今般の創立十

# 創立15周年に寄せて

嬉泉病院院長 須藤 祐司

十五周年記念、おめでとう御座居ます。心より、お慶び申し上げます。私にとつての東腎協とのお

つきあいは、故宝生会長との出逢いからです。昭和四十三年五月に日大板橋病院に入院中の宝生氏の主治医となりましたのが、氏との最初の出逢いでした。

当時は、都内の大学病院の透析台数は、総計でも二十台以下の状態であったと思ひます。透析治療費は入院で七十万円前後、その三割が自己負担でしたから、家庭への圧迫は想像以上でした。そんな

中で、宝生氏が、患者間の親睦、団結、福祉向上を計つて、ニール会の会を発足させたと思ひます。

宝生氏は大きな抱擁力と類まれなる忍耐力で、同じ腎疾患で悩まれる人々との団結の輪を駆け、腎疾患の方々の福祉向上に尽力なされました。その結果として、腎バ

五周年を契機に、自らの新しい発想と計画による次の活動に向つて、なお一層の御発展を心からお祈り申し上げる次第であります。

ンク登録者数の増加、腎移植の普及、腎移植保険適応等多くの同病者に朗報をもたらしました。

社会の流れの中で行政は、当該施設の意見よりも、住民サイドの意向にそつた行政がなされる傾向にあります。

医療界においても、患者さんの意向は、病院団体のそれよりも、強力に行政当局に影響をあたえています。

昭和六十年五月以降、故宝生前会長より、パトナツチされた、石川会長の責任は重大であります。石川会長の精力的な活躍ぶりは、周知の事実であります。

医療を取りまく環境は、益々厳しくなりつつありますが、役員諸氏におかれましては、健康に充分留意し、御活躍なされん事を、心より祈念致します。

# 15年の歴史を振り返って

## 結成初期の頃

副会長 平澤 三吾

東腎協結成まで

国に先駆けて昭和四十六年度予算に一億二千万円の腎不全対策費が計上され、都立大久保病院に二台しかなかった人工腎臓が十五台、収容人員三十人に拡充された。

この措置は、元全腎協会長、上田昭氏(故人)が、東腎協十年のあゆみの中で、「全腎協結成後の厚生省等に対する交渉で、この事実を強調、国も見習え」と迫ることができた」と述べている。

全腎協が結成されて東腎協が結成されるまでの一年五カ月間は、笠原英夫氏(故人)や寺田修治氏(故人)を中心に全腎協在京役員によって東京都への要請活動が行われ、昭和四十七年予算では二億五千万円の腎疾患対策費が計上された。そして、同年七月一日より人工透析治療費自己負担の半額が公費で補助されることになった。また、四月一日から小児慢性腎炎・ネフローゼ症候群患者二百人

を対象に治療費全額が公費負担されることになった。さらに、全腎協結成後の大きな成果として、同年十月一日より腎臓病患者も内部障害者として身体障害者福祉法の対象となり、人工透析患者が更生医療の適用を受けられ、医療費の国庫負担が実現した。

このような活動が行われる一方、昭和四十七年五月二十八日富士紡績会館で開かれた第一回東腎協結成準備会を皮切りに、在京病院患者会(当時十三重者会)役員代表が約半年間苦勞を重ねて話し合った結果、ようやく結成大会が開催される運びとなった。

### 東腎協結成から初期の活動

東腎協結成大会は、昭和四十七年十一月十九日、大手町都立産業会館において患者・家族百二十人が参加して開かれ、会長・寺田修治氏、副会長・小林孟氏、事務局長・堀江紀久雄氏などを選出した。そのほか、幹事・泉山知成氏(現・常幹)同・一ノ清明氏(現・副会長)は、大会後の第三回役員会から参加するようになった。

東腎協会費は、当初年間五百円で、全腎協会費六百元とは別々に徴収されていた。結成当時の会員四百人分で二十万円の収入見込みでは、役員活動交通費を支給することができなかった。

役員は多くは透析患者で、殆どの方が就職していた。このような条件で、全腎協活動への参加、都庁要請、都議会各党派陳情活動などが行われたが、第二回総会(49・3・31於・千駄谷区民館)までの間、皆なで頑張った。しかし、寺田修治会長と牧清美幹事が総会を前にして逝去されたことは大変残念なことであった。

『第一次オイルショックの影響』  
また、忘れることの出来ないもう一つの出来事は、四十八年十二月末の「第一次石油危機」による物不足・インフレの波及である。

この時は、新聞紙上で透析液の生産が削減されるかも知れないという報道に、一はやく全腎協が対応し、四十八年十二月二十四日、厚生省に透析液確保の約束を取り付けてくれたことは、腎臓病患者の命を守る。全腎協の活動が大きく評価された年でもあった。

第二回総会では会員・家族百八

が参加し、規約の一部改正を行い「会費は一人年間千円(全腎協会費を含む)となった。また、会員数は約七百人。加入組織は、新たに八腎友会を加えて十八腎友会となった。

### 「公費負担対象疾病拡大と福祉手当の支給が実現」

昭和四十八年度の活動は、泉山新副会長が中心になって、六月に会員の実態調査、八月に東腎協ポスター作成、十一月には第二回都議会請願などが行われた。

その他、都庁各局要請・都議会党派陳情活動の結果、七月一日から「心身障害者一・二級」の医療費助成の実施、八月一日から都内全保健所にて三歳児健診の項目とし検尿を実施、十月一日から悪性高血圧が都単独医療費助成対象に、さらに、十一月一日から、心身障害者福祉手当(月額五千円)の支給が実施されるようになった。

そして、全国自治体に先駆けて江戸川区が難病患者福祉手当(月額一万円)の支給を実施したが、当初の対象疾病に腎臓病が含まれていなかったために、八月二十二日に泉山副会長と佐藤幹事(故人)が、厚生部長、福祉課長に陳情し

た結果、人工透析患者にも適用されることになった。

この後、十一月十日の全腎協事務所の開設に伴ない、東腎協事務局は全腎協に間借りすることとなった。この間、東腎協会報第一号(四十八年四月三日発行)から第四号までは、吉田事務局次長が担当していたが、第五号(四十九年七月一日発行)から糸賀幹事が担当することになった。

第三回総会は全国労音会館(50・4・20)で開催され、会員・家族百人の参加があり、役員は、石坂会長(故人)、一ノ清副会長、平澤副会長、泉山事務局次長、加藤事務局次長、中島事務局次長、吉田事務局次長、井田会計、糸賀幹事、高橋幹事、宝生幹事(三代目会長、故人)などが選ばれた。この総会では、規約の一部改正で、会費が千円から二千四百円(年額、全腎協会費を含む)に値上げが決められた。

#### ④「ネフローゼ症候群」の予算化に

昭和五十年度の活動は、平澤副会長と泉山事務局次長を中心として、都庁各局、都議会各党への陳情活動が行われたがその結果、昭

和五十一年度予算で「ネフローゼ症候群が公費負担対象疾病(51・10・1日)」になり、都立大久保病院人工透析医療対策協議会の設置により、その報告書の中で、大久保病院に腎不全センターの設置が提言され、腎センター設置の必要性も提言された。

その他、十月五日に第一回親睦会を、五十一年二月二十九日に第一回関東ブロック会議(於、都勤労福祉会館)があり、各県代表十七人が参加した。

五十一年一月二十一日には、会報の郵便料金軽減をはかるために身定協に加入手続(平澤副会長)を行ない、SSKO通巻ナンバール機関誌が発行されることになった。そして、三月七日(於、千駄ヶ谷区民会館)には「腎臓病講演会と相談会」を開催し、好評を得た。

第四回総会(51・4・18)は、千駄ヶ谷区民会館で開催され、「愛のライフライン腎移植」の映画を上映した。

## 最近の医療問題

### 事務局次長 森 義昭

オイルショック後の昭和五十年

代に入って経済低成長時代を迎えて都財政は危機的状況にあった。そして、数々の福祉対策や腎不全対策の前進が行われた美濃部革新都政は破綻し、昭和五十四年四月、都の財政再建を旗印にした鈴木都政の時代を迎えた。

国内においても、昭和四十年代にいわれた「福祉優先」が、財政難を理由に「福祉といえども聖域ではない」といわれ、「福祉見直し」「受益者負担」が堂々と論じられるようになった。

#### 腎疾患の総合対策をめざして

こういつた状況の中で全腎協は、昭和五十四年五月、広島における第九回総会において、「腎疾患対策確立のために」を提唱した。この中で全腎協はこれまでの国や自治体の腎疾患対策を評価しつつも、一貫性に欠ける点を指摘し、近い将来に起こり得るであろう腎不全患者、透析患者の急速な増加による医療供給体制の飽和状態、医療費負担の増大という深刻な事態を解決するため、腎疾患の予防・早期発見、早期治療、腎不全の治療さらに社会復帰に至る腎疾患の総合的対策の必要性を説いた。こうして私たちの運動は、これ

までの会員の要求に根ざした運動体としての患者会に、もう一つ社会的な側面が与えられた。

東腎協の東京都に対する運動も当然この「腎疾患総合対策」の確立を柱としており、昨年十月に設置された「東京都腎不全研究会」はその成果の一つといえる。

重なる透析医療費の引き下げ  
こうした中で、高額な透析医療費は、常に医療費削減策の矢面に立たされた。

昭和五十三年に人工腎臓の技術料と材料費が「込み」にされて、事実上の引き下げが行われたのをかわきりに、五十六年には技術料の大幅引き下げが行われた。さらに、昭和六十年三月からの医療費改定で人工腎臓の技術料については、従来の三段階による時間区分を、四時間を境目とした二段階区分に変更され、また、ダイアライザーの購入価格についても値下げされた。

この結果、施設側の収益減を理由とした合理化や透析時間の短縮化が心配されたが、その後の全腎協や東腎協の調査では、全腎協会長名で各透析施設長宛に要請した「透析時間は医学的根拠にもとづ

いて決めて欲しい」との訴えが聞き入れられたと判断できる内容であった。

また、昭和六十一年四月にも二年連続で透析医療費が切り下げられたが、全腎協で要求していた夜間加算や食事加算の保険点数アップが認められ、夜間透析体制や給食内容の充実に力があつた。

#### 健保改善反対運動

昭和五十八年八月、厚生省は、被用者保険本人の給付率を八割に引き下げることを柱とした健康保険法の「改悪」案を発表した。この改悪案は国民の医療福祉を大きく後退させるもので、発表と同時に多くの自治体や団体から反対声明や意見書がだされた。

東腎協では十月に緊急幹事会を開き、全腎協や全国患者・家族団体連絡会とともに積極的に運動することを決めた。そして、抗議はがき運動、厚生省交渉、街頭署名、クリスマス患者集会、都議会陳情などの反対運動を展開した。

こうした運動により、五十九年十月一日から実施された新健保法では、被用者保険本人の自己負担を一割に抑えた他、「特定疾病」に人工透析を指定させるなどの成

果をあげた。東京都でも、今まで対象外であった健保本人も運動の結果、都単独事業の医療費助成が受けられるようになった。

#### 医療費不正請求事件

昭和五十六年には東腎協にとつて大きな事件があつた。それは七月の聖友会三施設と十二月の吉祥寺クリニックの医療費不正請求が発覚し、四施設とも保険資格取り消しの処分が行われたことだ。東腎協では、全腎協・患者会と連携し、取り消し処分の時期を引き延ばすなどの運動を行った結果、新

経営者によつて従来通り透析治療が受けられるようになり、東腎協や患者会の役割が改めて見直された。また同年十月には、東京都の人工透析医療機関の指定をめぐつて、都職員の汚職が発覚した。こうした一部の不正は、その後の国や東京都の腎不全対策に悪影響を及ぼすのではないかと心配された。

#### ニプロ事件

昭和五十七年三月、ニプロ社販売のタイアライザーを使用した透析患者の中から、大量の眼障害が発生したという事件がマスコミにより報道され、全国の透析患者に

大きな不安を与えた。被害者は、全国で百九十二人に上つた。この事件で東腎協は、全腎協と協力して東京の被害者調査表を作成するなど、補償問題解決に努めた。この

事件を契機に全腎協が要望した人工透析装置基準が、昭和五十八年六月に決められ、透析被供給部から留置針にいたる品質などについて細かく定められ、より安心して治療が受けられるようになった。

#### 腎移植推進運動

昭和五十五年一月、「角膜及び腎臓移植に関する法律」が施行され、これ以前から行われていた腎臓提供者登録制度、手術費用の健保適用、更生医療の適用、地方腎移植センター計画などとあいまつて、腎臓移植体制が大きく前進した。しかし、昭和五十二年に設立されていた腎臓移植普及会への提供登録数は、私たちの期待には程遠いものだった。

こうした中で全腎協が主催して昭和五十六年十一月に、第一回の全国いっせい街頭キャンペーンが催された。東腎協は都内三カ所に会員など九十二人が参加して行った。運動の結果は登録数に劇的に

現われた。これまで東京の月平均の登録数は数十人程度だったが、十一月は二百人、十二月も百四十人を超えた。こうして昭和六十年まで全腎協主催のキャンペーンに参加してきた。

昭和六十一年になって、今までの国会請願署名運動などの成果で厚生省は毎年十月を「腎移植推進月間」とし、この運動は国民運動として認知された。

東京都においては、腎移植対策においても腎摘出費用の助成など国に先駆けた事業を行ってきたが、腎臓提供者登録拡大運動については、昭和六十年から協力体制ができた。そして、六十二年度の予算で初めて腎移植推進キャンペーン費が予算化され、この十月十八日に、東京都・東京都医師会、東腎協の三者主催によるキャンペーンに決つている。

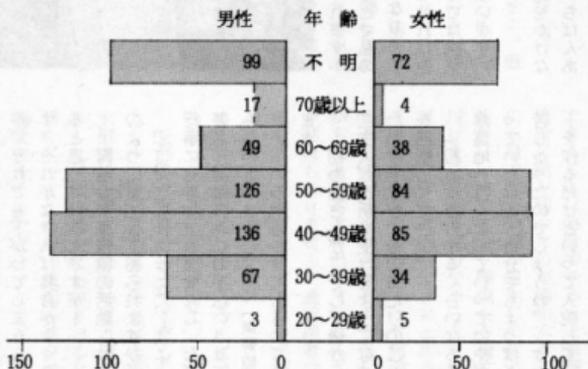
また、本年は、虎の門病院が国の地方腎移植センターに指定され、従来からの東京医大八王子医療センターとともに、東京における腎移植センター病院として機能することに、登録・移植体制の充実に大きな前進があつた。

# 透析10年、15年 を生きて

透析歴・男女別・年齢分布

透析歴	20~29		30~39		40~49		50~59		60~69		70歳以上		小計	種別	合計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女								
10年	1	1	14	8	18	19	31	20	12	11	4	1	11	10	91	70	1	162		
11年			1	16	7	28	16	22	21	9	8	4	1	21	11	100	65	1	166	
12年	1	3	13	8	27	11	20	19	11	7	3	2	18	9	93	59		152		
13年				10	6	29	20	12	8	4	5	3		17	22	75	61	1	137	
14年	1			3	2	14	4	18	6	6	3	1		24	14	67	29		96	
15歳以上					11	3	20	15	23	10	7	4	2		8	6	71	38	1	110
小計	3	5	67	34	136	85	126	84	49	38	17	4	99	72	497	322	4	823		
合計	8	10	1	2	2	1	0	8	7	2	1	7	1	8	1	9	4	823		

年齢分布



東腎協は、結成十五周年を記念して十年以上の透析者の名簿を作成しました。十年以上とは、一九七七年（昭和五十二年）十一月十九日以前に透析を開始した人を対象にしています。

十年以上の透析者は八百二十三

構成比は、男六〇・四％、女三九・一％となっておりますが、透析十年の男女構成比では、男五六・二％、女四三・二％で男女比が縮まる傾向がみられます。

年齢については、生年月日を記入する方法をとりましたが、無記入のものが多くありました。

年齢別（グラフ参照）では、男女とも四十～五十九歳が多く六六・一％で十年以上の全透析者の半数以上を占めています。編集委員会は十人の会員をインタビューして特集記事にしました。十人の方は、長期の闘病生活に負けないで頑張っている人ばかりです。

## 「ご主人を励まし ながら自ら透析

清水 ふじさん

杏林腎友会

透析歴 十年二ヵ月

三鷹市在住

はじめまして。早速透析を始めた時の様子をお聞かせ下さい。

「透析に入る一年前、先生から透析をする状態だけど塩分をひかえて安静にしていればもっと先に延ばせるといわれていたんです。それが一年後、風邪をひいて尿毒症になってしまったんです。それから先は自分では何もわかりません。二週間くらいたつて気がついていこうんです。何かがめでたいのだからと思っていたら「あなたはその世から帰って来たんだから長生きするよ」といわれました。——その間は「ご主人の協力で？」

「いえ、近所にいる娘がほとんどやってくれました。病院の送り迎えは娘さんがやってくれて。二人だけでは生きていきませんよ。買い物も必要な物は自分で選んで後は娘にやってもらうんです。でも、この二年くらいは輸血もして

いないし…。それまでは毎月輸血していたんですが、輸血をしてもヘマトが二%くらい、しなければ一八%くらいでした。今では輸血しなくても二四—二五%くらいあります」

「貧血のほかに苦しかった」とはありませんか。

「血圧が下がってしまっています。それで足がつかれたり、あまりひけないのですから、食べたり飲んだりも自分で気をつけなさい。十年もやってくれば自分を抑えることができますが、先日もお父さんが「足がむくんで重くてしょうがない」といって、いくら食べたい物でもこれを食べたら身体に悪いと思ったら我慢するくらいでなかったら透析にはついていけないです。それです。よかったですね。食うことをギヤー・ギヤーいうなつて。これが十年間のキャリアあつていのもんですかね」

「十年間、大変苦勞なさいたようですが、これまでがんばつてこられたのはどうしてでしょう。」

「私はとても恵まれているんです。姉妹が近くに住んでいて何かあればすぐに来て力になってくれ



ますし、娘が手伝ってくれますから。それにいろいろなことでも私の気持ちもずいぶん強くなりました。精神的に強くなれば生きていけませんよ。今では病氣半分気持ち半分と考えています」

「趣味のことなど。」

「とにかく人様に迷惑をかけるいで生きていけないのがいちばん気がたいてですね。そのほかには芝居を見たり、時々旅行に行ったりしています。今も箱根に行くんですが、箱根は今年三回目です」

「これからの透析に望むことがありましたらお聞かせ下さい。」

「時間が短くなることです。それから血圧が下がらないようになること。今は血圧が下がらない

薬を持続的に使っているんです。それでも下がってしまうんです。それがなければ具合がよくなると思っているんですが。」

「腎友会や東腎協の活動にはどのように参加しておられますか。」

「本当にお役に立てないんです。行事にも参加できませんし、ただ署名・募金の時にお手伝いさせてもらっています。それに「東腎協」でいろいろ勉強させてもらっています」

「初め奥さんが、そして後から「ご主人が透析を受けるようになったわけですが、そのあたりのことをお話してください。」

「初めは透析するくらいなら多摩墓地へ行くなんていっていやが苦しかったので、自分でもよっぽど苦しいだけというふうね。シャントを作るだけといつて入院して一ヵ月後に透析を始めました。私でさえこんなに元氣になれたんだから、もっと軽かったお父さんはあと十年も二十年も生きられますよ。——年が違いうよ。」

「ご主人の言葉に一同笑い。」

「どうもありがとうございました。」

(聞き手 井上)

## 家庭透析で

## がんばる

安西 一夫さん

拜島三井クリニック腎友会

透析歴 十三年八カ月

日野市在住

「あゝの頃は透析について教えてくれる人もなく、まるで霧の中にいるようでした。周りの人が次々に亡くなるので自分も死ぬのかもしれないと思っていました。当時、同室の人が毎朝のように同じレコードをかけていたのですが、それが『太陽がいっぱい』って曲だと知って、太陽がいっぱいって生きてることなんてなんだあなんて思ったりもしました。その頃は透析効率が悪くて水を飲めなかったから、看護婦さんが何かを洗う音がするととんで行ってガブッとやりたいと思うことがしばしばでした。それでも心胸比が大きくなるのはいやで乾燥した物はかり食べていたら、ある時それが詰ってしまって何日も便通がない。これは大変だと病院に行ったらなんと開腹手術をすることになってしまいました」

た。透析患者は水分を制限するあまり便秘や痔になることが多いと思いがちですが、これは大変だとせんね。その後はたいしたトラブルもなくやってきました」

「この十三年間、透析をしながら頑張ってこれたわけですが、心の支えになっていたものを……」

「子供ですね。自分の子供であればその成長を見とどけたいか願うのが人情ではないでしょうか。それに、幼い子にとって親が必要なんです。そんな義務感が励みになっていたようです」

「今後の透析に望むことは……」

「まず、透析時間が短くなることですね。それから携帯用の透析機がほしい。これがあればどこにでも出かけられますからね」

「腎友会や東腎協の活動についてどうお考えですか。」

「腎友会については、いろんな行事に参加する人が決まっています。これはいけないと思います。先日の勉強会にしても先生が一生懸命講義してくれるのに患者の方で参加しないのでは失礼です。通院者なら気分が悪くても透析には来るのだから出席できないことはないはずですよ。そんな人ほど講義

をよく聞いて自己管理をしつかりやるべきではないですか。自分の身体のことなのだからもう少し自覚してほしいと思います。」

「東腎協についてですが、多摩なら多摩で独自に活動できるとよいと思います。行事に参加したいと思っても会場が遠いと考えてしまおうし、透析者にとって交通費も馬鹿にならないですから」

「趣味のことなどをせひ……」

「史跡めぐりをしてしています。歴史が好きなので道祖神や石仏などのいわれを読んで現地に行き、往時のことに思いをめぐらす、これが楽しいですね。それから山歩きもよくやります。清水を探しながら歩くんですよ。見つけた清水でうがいしながらおむすびを食べる。これがまたうまいんです。時には入れ物を持って行って水を汲んで来てお茶を入れる、これはどこそここの水だと思いがちなんです」

「とても気分がいいですよ」

「最後になりますが、家庭透析を始められたことについてお聞かせ下さい。」

「長い間透析を受けてきて、自分の身体のことでは自分で責任をもたなければと思っていました。それならばいいそのこと透析も他人まかせにするのではなく、自分でできることは自分でやろうと家庭透析に踏み切ったのが昭和六十一年の五月です。時間が自由にできるのはいいのですが、準備から後片付けまですべて自分でやらなければならぬので面倒くさいと思うこともあります。すべて病院まかせで、水を飲みすぎて苦しいから何とかしてくれっていうんじや話にもなりません。透析患者は患者としてのプライドをもつ必要があると思います」

「今日はお忙しいところ、どうもありがとうございます。」

安西さんは自分にとっても厳しい人です。その厳しさがあればこそ家庭透析でがんばれるのだと思いました。このほかにもいろいろな話を伺いましたが、紙面の都合で割愛させていただきます。

(聞き手 井上)



## もうすぐ透析21年

人工腎臓虎ノ門会・高津会

星野ミチヨさん



星野ミチヨさん、一九四一年(昭和十六年)一月九日生まれ、透析を開始したのは、一九六六年(昭和四十一年)十二月九日。東腎協の会員の中で最も透析歴が長い。「みんな(虎ノ門病院で透析を受けている人)明るくはがらかな人ばかりですよ。家にいる時は、病人じゃないと思ってるし、週二回の透析は休憩をしているんだと考えています。」

余り考え込んだりしてしまうと他の人にすぐわかってしまう方なです。また、データも悪くなる

(貧血) んですね。入院は、嫌いだから余りしたことがありません。

本院で腹膜灌流を二年八カ月、そして分院へ移って本格的な透析療法に入った。

## 発病の頃

「透析に入る前年」千葉の勝浦に泳ぎに行つて帰った翌日、ソウのような足、お父さんに脚氣じやないかと言われて虎ノ門(病院)へ行つたら一週間の検査入院。余り無理をしなければ大丈夫と言わ

れましたが、その頃、お花、お習字を習っていて習字は宿題が出るでしょう。それで夜中の三時頃までやっていました。

スイカやせんじ菓なども飲み、あそこへ行けば治ると聞くと朝早くから出かけていったこともありました。

私は、夏だけ弱いと思つていたのでよね。結局、腎臓が悪いというのがわかつたのに時間がかかつたみたい。どこかが痛いというのならわかるのに。食べものだってまずくないんだから。」

最初の透析は大変だったでしょう。

「最初、月水透析だった気がしますが。間が四日あるでしょう。それがなかに二日、三日になるようになりましたが。」

キール(型ダイアライザー)の膜張り(プラスチックの板を重ね合わせ、その間にセロファン膜を張っていく)もやりました。三時頃になると「星野さん、星野さん」と看護婦さんに呼ばれ、膜張りを手伝いました。けっこう楽しかったですよ。

眼科の先生が、「五年生きなさい」と言つていたので三村先生

(主治医)に「五年生きました」と言つと「あと五年生きなさいよ」と言われたこともありまして。」

——透析に入ったシヨックはなかつたんでしょうか。

「自分が死ぬとか生きるとか考えてませんでした。早くこの苦しみから楽になりたいという気持ちが強かつたですな。」

## 現在の生活について

「店(自宅は寿司屋)の人が食べる食事の世話、夜は十時、十一時まで店の手伝いをしています。土日祭日は休みなのですが、土曜日は白衣などのアイロンがけがどつさり、日曜日も夕方から翌日の仕度をし、みそ汁のネギを刻んだり、けつこう忙しんですよ。」

まもなく透析歴二十一年になる星野さんは、現在も週二回透析で仕事をしながら元気で頑張っている。

その秘密は、彼女の楽天的な性格、まわりの人がよくしてくれるという感謝の気持ち、そして最良の医療条件での透析と私は感じました。インタビュで、透析導入当時の医療費に触れなかつたのが悔やまれる。(写真と文・加藤)

# 苦しい闘病生活にも負けず

代々木病院腎友会 栗原 勇さん

## 透析導入の頃

「機械(透析)にかかれたことの運のよき、間もなくコイル型ダイアライザー、そしてフォロフアイバーのダイアライザーによつて飛躍的に透析がよくなっていったね。あの頃(十五年前)は、毎年死ぬ人がいて、忘年会をやる時には必ず黙禱をしていた。運がよくてあと三年、まあ二年生きられたら良い方だと感じていました」

栗原勇さんは、一九七二年(昭和四十七年)十月二十三日に透析に入りました。それまで職場を三



年半程休職し、闘病生活にあぐ

れしていましたが、ついに透析生活に入ってしまったのです。そして、間もなく職場復帰しました。首を切られる寸前でした。

「休職期間中は、本当にきつかった。二人の子ども(透析導入時で六歳、三歳)も小さかったので経済的にも大変でした」

全腎協の結成大会(一九七一年六月六日)に参加した栗原さんはこんな発言をしています。

「……社会保険の本人なので透析を受けるようになったとしても、百分の保障がありませんが、あと十カ月つと二年目になります。会社をクビになります。腎臓機能が三〇%という事で会社に帰れる可能性はうすい。さらに五年たてば、健保も打ちきられ、莫大な費用がかかり、透析を断念せねばならなくなるの

では、という不安にもかられます。病なかばで病院を出て働き病気を悪化させた人々をたくさん見てきました。病人が病氣である間は、安心して治療に専念できるようにしてほしく切に思います。私は父を戦争でなくしました。もし私が死んだら子供は私と同じような苦しみを味わう事となるだろう。現在のみじめな生活をするならば働きたい。(「全腎協」創刊号より)

これまでの透析生活

「体質にあつたダイアライザーに行きあたるまでいろいろな事がありました。病態として貧血・鼻出血・食欲不振・消化不良(胃腸のアレルギー)体質を知らなかつた。副甲状腺機能が亢進して背骨が前・横に変形、上半身が十cmも短縮してしまいました。

二年前に女子医大で副甲状腺の手術をしましたが、悪い症例の三番目だったといひます。それまでかゆくて寝ていても一時間一時間半位たつと全身がかゆくなつてしまい、どんな寒い時でも起きて身体中をタオルでこすつていました。

ので歩くとき腰が痛くなりま

す。

痛みと疲労の続く中で、杖にすがつて職場と病院に通い続けました。退職やむなしと再三考えましたが、あとの暮らしがどうなるか、障害年金だけでの暮らしは無理なので将来とも不安です」

長い間、腎友会の会長を務めてきましたが、「痛み、痒み、不眠、疲労で、この数年夢遊病者のように暮らしてきました。協力のできないことが心苦しい」と現在の心境を語つてくれました。

将来のこと

「生きていることが生甲斐。永遠に続く生命の見えるだけ先を見届けたい。

基本的には通院しなくても生きていける方法の確立、移植や埋込型人工腎の完成を含め、突飛なようでも針をささないで、睡眠を一定の容器のなかでとれば効果のあるようなものができると良い。(昔地球の裏側の声が瞬時に聴こえることなど狂気の考えだった)」

苦しい闘病生活の連続だったに違いありません。しかし、これからも精一杯頑張つて生き抜いていって下さい。(聞き手 加藤)

## 腎移植を2回……

## そして、さらに機会を望む

上野病院しのばず会 浜野 広平さん



右から3人目が浜野さん

二回も移植をなされ、残念なことには、結果が思わしくなかったということは、同じ病院なので、知っていました。けれど病院患者会の会合で一緒にしても、そういうことには話題が進まず、表面的なおしゃべりをするのが多くて、果して今回、心を開いて下さるかどうかが心配だったので、ベッド・サイドに押しかけて、お話をうかがいました。

— 透析導入当時の印象は—

「何もなし。医者に—ショックはないのですか、あなたみたいな人も珍らしい—と言われたよ。ホント。まあ、導入してすぐ、若い医者に—移植をすれば治る—と言われたんだよ、それで、ずっとそ

う思ってきたから、透析になって一度も吐いたこともなし、別にいやでもなんでもなかったよ。二十一歳の時だけど、それまで、ネフローゼ症候群の下地があって、治療するほどでもない感じでしたんだけど、心不全になって、すぐ透析したんだ」

— これ迄の医療面のトラブル—  
「いっぱい、あるのじゃないの、みんな、長くやっているといろいろあるでしょう」

— 生き甲斐は何でしたか—  
「生き甲斐？ 普通に生きてきたからね。仕様がなから生きちやつてる。結婚もしたくないしね、女友達も結婚はしないというのと、離れていくことあるしね。まあ、そりゃ、親より早く死にたくないのは常識的に考えて当り前だし、みんな、生き甲斐もって生きているのかな—」

— では、移植のことを—

「一年目で生体腎（お母さんから）これは一週間ぐらいいったかな。あと五年ぐらいいして昭和五十六年に死体腎移植（アメリカからの空輸腎）これは三週間の生着。生体腎と死体腎では雲泥の差があるね。死体腎だと稼動するまで、

一週間ぐらい倦怠感がすごい、尿が出るまでは僕の場合透析もしなくちゃならなかったし、どっちも薬ではないよ。でも、薬がよくなったから、将来、機会があれば、また、やりたいね。

甘えていれば、透析の方が楽なのじゃないの、一種の保護になるでしょ。移植をして壁をやぶってどうのこうのという訳じゃないけど、時間の縛られずに済むでしょう。若い人とか、透析が苦しい人は移植した方がいいね。

ブレドニンを飲むのは身体によくはないけど、それに、日本の現状じゃ、死体腎の数が絶対的に少ないから、びつたり型が合うのは1%ぐらいでしょ、アメリカでは日本じや考えられないよ—」

— 患者会について—

「キャンペーンは腎臓はもちろん、目も肝臓も必要なんだから、大々的にやるべきだよ」

— 今、困っていることは—

「お金がないことぐらいいかな（笑い）リンなんか自分で食事管理するし、あとはスタッフの知識の向上だね。」とドライなタッチのお話でした。

（文・木村）

## バレーボールと共に生きる

松和患者会・四谷支部 岡 正博さん

### ◆さわやかスポーツマン◆

岡さんに総武線平井駅でお会いしたのは敗戦記念日の八月十五日であった。真夏日で夕方ではあったが、まだ暑さが残る中を、軽快な服装で、いかにもスポーツマンらしい印象でした。

大学四年の時、就職のための健康診断で病気がわかったのだが、「痛くも痒くもなかったので、ピンと来なかった」それが六月頃で十月には鼻血が出てとまらなかつたりするようになり、透析の説明を受けたが、

「歩けなくなって、大変だなとは思ったが、具合悪かったので、よくなりたという気持ちの方が強く、悲憤感はなかった」と淡々と話される態度には、天性の前向きな気持がにじみ出ていらつしやう。筆者などは、同じ一九七二年(昭

和四十七年)に導入しているのですが、長い間、悲憤がついていたので、恥かしくなりました。

その後、輸血は大分したものの大したトラブルもなく、一年目から働き始め、臨時要員ではあるけれど、区立の中学にお勤めなさっているとのことでした。

「正規の職員にはやはり透析が原因のようではたしません」とも話され、いつもながら、就職の壁の厚さを痛感しました。

中学生の時かバレーをなさっていた、大学の時には自らは余り語りませんが、スポーツ音痴の私にも感じられる、大活躍のご様子でした。現在も、コーチとして江戸川区立中学校のバレー部を指導なさり、生き甲斐という質問には「バレーにつきますね」とニコッリされたのが、とてもいい笑顔で、きつと部員達にも慕われているこ

とでしようと思像できました。「試合・練習・審判の繰り返しで、一日体育館にいと塩を吹くほど汗をかき時もあります」と透析を忘れたような言葉でした。

でもやはり透析医療に対しては「今後は、長命ということは前提として、自分も股関節が動きにくくなってきているし、細かい二次的な症状がよくなればいいですし、初期の腎臓病の頃に治る方法があればもっとよいと思う」と言われました。学校にいる関係で腎臓病の生徒と接することもあり、検尿制度のため早期発見はできるようなったが、その後の治療法がないものかと強く思われている

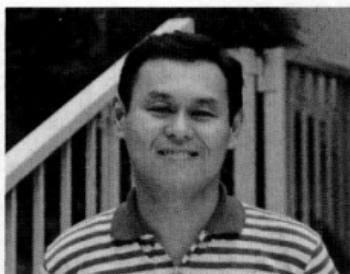
様子の方がわれました。

### ◆将来を見すえて◆

患者会でも幹事をなさっていてご自分より若い人には声をかけやすいが、「昔は生きていることが光っていたが、今は同病意識も薄くなり、連帯感がなくなつた」と古い患者である筆者も同感の言葉でした。また、東腎協や全腎協については、「大勢の人達の代弁をしてみらうということと、まともでない」と交渉ができないという点からも大事だ」という言葉をいただきました。

それに、「今は別に特に困っていることはないが、将来、年をとった時にはどうするかということも考える」と、透析患者の老化問題にも、考えをお持ちになつておられ、これは東腎協でも考えなければいけない問題だと常任幹事仲間と話していた事なので、たくさんの示唆を得ることができ、内容の濃い時間を初めてのインタビューで持てたことを岡さんに感謝しつつ対談を終りました。

(文・木村)



## 透析初期の苦しみをぬけて

今尾医院腎友会 竹田 清志さん

八月八日(土)、立秋とは名ばかりの猛暑の中、今尾医院(東大井)の五階談話室に竹田清志さん(四十七歳)を訪ねました。竹田さんは今尾医院腎友会の会長もやっていて、透析も今尾医院では一番長く、新しい患者の模範となっていてます。

### 透析導入のころ

「透析はいつから始めましたか。」

「昭和四十八年(一九七三年)五月にかぜをひいて、目の前が明るくなり、吐きけがし、血圧上昇で、蒲田病院から東邦医大へと移り、部屋がとれ次第すぐ入院しました。病気のことがよくわからなかったので、婦長さんと泣きながら色々相談しました。」

東邦医大には透析のスペースが



「七月十二日から意識不明になり、七月二十日に気がつきました。気がついた時、なんで田舎(富山)の人たちが前にいるのか不思議に思った。」

「意識が混乱し、わめき、あばれる毎日で、一日にベットが三十cmも動くほどだった。それから、悩み、不眠、そして自律神経失調症(顔面変形、脱力)、血圧の変動が激しく、シャントトラブル、視力低下(一人で歩けないほど)で、三年くらい入院退院を繰り返しました。」

「その頃の状態は。」

「七月十二日から意識不明になり、七月二十日に気がつきました。気がついた時、なんで田舎(富山)の人たちが前にいるのか不思議に思った。」

「意識が混乱し、わめき、あばれる毎日で、一日にベットが三十cmも動くほどだった。それから、悩み、不眠、そして自律神経失調症(顔面変形、脱力)、血圧の変動が激しく、シャントトラブル、視力低下(一人で歩けないほど)で、三年くらい入院退院を繰り返しました。」

### 社会復帰について

お仕事は。

「意識混乱の時に板屋さんが見ている、『あいつはくるった』とみんなに言いふらしたので、体が戻っても仕事をやらせてもらえなかった。」

その後、今の仕事(自動車塗装)

「ついてずつとやっているが、健康な人でもきつい仕事で、何やめようと思ひ、大森の職安や、区の障害者斡旋(大田区産業会館)に行つたが、透析患者を受けつけないので、ずっと続けている。十五歳の時からやっている好きな仕事でもあり、会社も体のことを知っていて理解もありますので。」

婦長さん、佐々木勝彦さん(透析本人・今尾医院職員)にも加わってもらい話を続けた。

「仕事ができる状態なのに、仕事につけない人が多いのです。」

婦長さん

### 何を生き甲斐にして

「ご家族は。」

「女房と、長男(二十歳)、長女(十五歳)です。」

「ということは、娘さんが生

まれてすぐに透析でしたね。

「息子五歳、娘一歳で、あの状態でしたから、長男を二カ月ぐらいい田舎に預けました。」

「透析を始めたころは、あんな状態でしたから、息子が卒業して、就職が決まった時は、竹田さんとだきあつて泣きました。」

婦長さん

「何を支えに?」

「あまり悩むと悪くなる一方だからと心を転換し、悩まないようにつとめ、海釣り、油絵、さつきづくり、カメラと広く浅くやっています。」

そして支えは、子供二人をなんとしても世に送り出せるまでは、たとえ骨になつても生きてやろうと思つています。」

今尾医院の方たちと初めて会つて話をしたので、婦長さんを「おかあさん」とみんなで呼んでいるように、家族的な雰囲気伝わってきました。

院長先生も協力的で、春、秋の旅行、忘年会など毎年行っています。二年程前には作品展(写真後方の作品)を開きました。竹田さんは会報を出してみたいと意欲的です。(文・草間)

# 仕事と絵の個展で忙しい

腎研友の会 中村 明彦さん

八月二十七日(木)、残暑の厳しい一日、腎研クリニック(高田馬場)隣の喫茶店で中村明彦さん(四十三歳)にお話を伺いました。中村さんは、仕事(大学食堂)、絵の勉強、透析と一日をフルに使っている毎日ですが、今は丁度食堂が夏休みなのでと気軽にお話をしてくださいました。

## 発病のころ

「いつごろ腎臓病と言われましたか。」

「昭和五十二年(一九七七年)の初め、吐き気があり、もどしたりしたので日大病院(板橋)へ行き検査をした。検査の結果、すぐに透析ということで、腎研クリニックでシャントなどで透析をしようとしたが、血管が細くて出来ず、日大病院(駿河台)に入院して透析を始めました。」



当時の印象については患者が少なくスタッフの交流が盛んで楽しかったと語っていました。最近この病院でも交流には苦労しているようですが……

## 仕事のこと

「絵を描いているそうですが「大学時代(経済学)から絵の研究に通った。卒業してから三年ぐらい(資金集めのため)してからフランスへ行った。最初が一年半、二回目が半年です。」

腎研友の会の会報で、「三十一歳で結婚して、再びヨーロッパ行きが決まり、スペインでの生活が待っていたのですが、念のために日大病院で受けた検診が私の人生の歯車を変えてしまったのです。ニュースでは母校の大東大が関東大

学箱根駅伝で二年連続優勝を果たしたと書いていました。」

「どのような絵を描いているのですか。」

「具象画、以前は風景画だったが、写生に行けないので、人物画を描いている。モデルさがして大変です。」

「何度か個展をやったそうですが。」

「最初にグループ展をやり、その後個展を三回やっています。これは全部病気になるってからやりました。来年夏に四回目の個展をやります。」

透析になってからの方が精力的な活動を続けている中村さん、日常生活も、奥さんの送り迎え(大東文化大学学生食堂、銀行、税務署、仕入れと健常者以上に忙しい毎日です。)

## 趣味、生きがい

「お忙しいのに趣味なんかをもうめますか。」

「趣味ってなんだろうかと思う。音楽をかけながら絵を描いていますか……。」

私は外国(シンガポール)で生

まれて、中学一年まで芦屋(大阪)で育ち東京に来ましたが、父が九州なので九州男児と思っています。それで子供の頃からライオンズファンでした。西鉄と言った方が良いと思いますが……。

他にも何かやりたいのですが、時間がおしいので絵に回します。」

「心の支えになつていてることは。」

「親から受け継いだ仕事(食堂)と絵の勉強です。」

「今、悩んでいることは。」

「不眠症に悩まされています。さきほど言ったように来年の個展や二科展で忙しくて眠れなかったこともあったのですが……。」

四、五時間眠れば良く眠ったと感じます。先生からは不眠症を直すためには健常者と同じような生活に言われています。」

「患者会とかかわりは。」

「できるだけ長く存続してほしい。心の支えにもなっている。」

中村さんは、二十一世紀までなんとかがんばる、それには患者本位の医療が必要と訴えています。奥様と二人三脚でがんばって下さい。

(文・草間)

## “自己管理法”で 透析人生を頑張る

織本病院 白井 忍さん  
東京都清瀬市在住

はじめまして。透析に至った経過をお聞かせ下さい。

私は、昭和四十七年十二月に、風邪が原因で、扁桃腺炎から急性腎炎を発病し、血圧も一向に下がらず、食事も取れない状態になり、入・退院を繰り返し、五十六年には、急激な腎機能の低下で、尿毒症になりました。六日間で昏睡、危篤状態が続いたので、直ちに、外シャント造設と腹膜灌流を行いました。その結果、翌日にはICUで意識を回復、目の中に紺碧の空と、ベットに寄り添う妻の顔が飛び込んできました。その時はまさしく、俺は生きている”が実感でした。



——仕事に対しての影響はどうでしたか。

五十年九月に退院後、直ちに、「これが透析療法だ」の本を読み、重要な箇所を線で引き、職場（大学職員）の人事課に自ら出向き、

透析患者は、社会復帰が非常に重要である”と主張した結果、以前同様にも動めることができました。

——自己管理法はどの様にしておられますか。

最初は、水分・塩分制限で、患者として必要で基本的な知識を勉強しましたが、透析後、ずっと、自分は自分なりの自己管理法を築こうと努力してきました。その結果、透析患者は、医学・栄養学の基本的知識の基に、僕自身が考えついたことは、思いきった、今までの食事療法の概念をはずして、もっと新しい未知の部分がないかと考え、「自己管理法」をつくり出すことが目的であったわけです。例えば、僕が行っているのは、一週間を通して取る蛋白質を約三百gとし、僕の透析日は、火・木・土曜日なので、火・水・木・金曜日は一五日以下、土・日・月曜日は、それぞれ四九以下としていきます。又、徹底的な野菜食で、

生野菜から炒め物まで、一切野菜を中心とした食事療法なので。

この方法で、カリウムは大きく上昇せず、導入時一三%であったヘマトも現在三四%、心胸比は約三八%を維持し、順調な状態です。

——というのは、透析の効率に適した蛋白質の摂取により、血中の老廃物（尿素窒素等）の蓄積を防ぎ、ヘマトの上昇をみました。そのような事から、この療法を続けて今日に至っています。

——生活をしていく上での心情をお聞かせ下さい。

五十年頃、アパートを借りるにも困った状態でしたが、透析二年后、五年生存が困難と言われた当時、二十年を生き抜くために、相当な勇氣と決断で住居を購入しました。それは、透析導入直前ですが、四十九年、腎不全との闘いの中で、余命いくばくも無い事を覚悟の上で、私の結婚を決定してくれた妻のために、敢えて二十年という具体的な道しるべが欲しかったことに外ならないです。

——これからの透析医療に望むことは何ですか。

僕も、いろいろ考えましたけれど、まず、透析膜の改善がはから

れること。そして、又、合併症の問題にも取り組んでほしいものです。今日、医療界だけでなく、社会一般に「患者の為の医療について」問題提起されているが、同時に、私達透析患者もこれからの医療行政と、急速な社会の変化の中で、どう対処し、生き抜くべきかを問われることと思うのです。

——患者会との関わりは。

患者会は、患者同志の親睦を旨とする事は、勿論の事ではあるが、医療スタッフの方々の深い理解と相互の立場を尊重した”いたわりの精神”の基に、その存在の意義と活動の成果が、期待できるものだと思います。私は、今後、そうした観点に立つて、患者会と関わり合っていきたいですね。

——本日は大変お忙しいと伺

ろ、どうも有り難うございました。白井さんは、織本病院で、患者さんの手本になるような、非常に貴重な存在の方だということですから、自ら透析の勉強をし、徹底した、自己管理法をなさっておられ、頭の下がる思いがしました。とにかく、二十年と言わず、三十年、四十年を目指して頑張ってください。

（聞き手 鈴木）

## 家族・仲間達と共に透析13年

吉祥寺クリニック

牧山 幸子さん

東京都国分寺市在住

—— こんには。早速ですが、どうして透析をしなければならなかったか、お聞かせください。

昭和三十八年頃に、重度の妊娠中毒症になってしまった。太つてはいけないということで、塩分、水分制限を強いられましたが、治りきらずに、慢性腎炎になってしまいが、四十九年十二月に心筋梗塞を起こし、急激に腎機能が低下し、危篤状態となってしまったので、直ちに透析が始まりました。当時は、透析の技術もあまり発達していなかったのですが、一回六時間間の透析を行いました。なに分にも、透析膜の効率が悪いために、亡くなってしまおう人が多い時で、



明日は我身かと、恐い思いをしました。又、その頃は、歩くにも、息切れがひどく、階段を昇るのさえも、苦しい時でした。しかし、透析を一回一回重ねる度に、身体も楽になり、元気になることができて、ありがたく思っています。

—— 自己管理の点は。

透析患者として、守らなければならぬことは、完全とは言われませんが、まあ普通に行っています。私は、導入時から、カリウムが上りやすい体質なので、自分の身体を良く知るまでは、ちょっと月日がかかりました。食品交換表を見たり、仲間に関いたり、これでもか、これでもかと、毎日の苦しい闘病の中で、悔しきやがゆさを感じました。毒素をさくさくさを感じ、と焦れます。まずまずデータ的に高くなってしまい、やる気をなくしたこともあります。しかし、一日の食事、しっかりカロリーを摂る様になってからは、カリウムも大きく上らず、ヘマトも三〇%前後を維持することができ、良好な状態が続いて今日に至っています。

—— 今までに、何かトラブルはありましたか。

医療面においてはのトラブルはありませんが、五年前に、自転車に乗ってしまっていて、冬ですから、霜ですべて倒れてしまい、シャントをかばったのですが、その時に、左足を複雑骨折してしまい、その治療のために、三カ月間の入院をして、家族に心配をかけてしまいました。

—— これからの透析医療に期待することは何ですか。

技術がより以上に発達して、効率の良い透析ができることです。又、経済的にも、この治療はお金がかかりませんが、技術の進歩により、新しい機械が開発され、できたらならいですが、皆、平等に使うことができましたね。

—— 心の支えは。

「今日は透析だ。明日は透析だ」と思いつつ、先生、スタッフ、家族、仲間を支えられ、丸十三年過ぎましたが、長年の間には、大きな溜息が出る時もしばしばありましたが、私としては、気分転換にレコードを聞いたりしたので、神経質に考えることなく、クールに過ごしてこられました。今後とも一日一日を大切に、感謝の気持ち絶やさず、病気に打ち勝っていきたいです。

—— 患者会について。

私は、二年間、東腎協の役員を務めさせていただきましたけれど、本当に皆さん、私達の為に、大変な努力をされていますし、現在、通院している患者会でも、よく協力をしてくれました。しかし、まだまだ患者会の活動として、もの足りない部分があるのではと考えます。各自が、会に対する認識を深くして、大勢の人に参加してもらい、もっともって活発に運営をしていく必要がありますね。一人の力が限界がありますが、多くの人が集まれば、それなりの大きな力がでてくると思っています。そうすれば、私達は、安心して透析を受け、生活をしていくことができます。私達のできる範囲で、これからも協力していくつもりです。

—— 本日はどうも有りがとうございました。

牧山さんは、私と一緒にクリニックですが、一日一日を大切に、前向きな姿勢で人生を歩んでおられ、非常に感ずることがあります。どうか、これからも元気で頑張ってください。(聞き手 鈴木)

## これからも頑張つて

## 透折10年、15年以上の会員紹介

## あけぼの友の会(30人)

## 〈10年以上〉

井上ミツ子 岡元トキヨ

吉田 光代 尾形 義子

川羽田久子 大賀由喜子

本田 浩之 石井 則江

矢部あや子 石川 豊彦

尾島 学 大木島美枝子

松島喜旬雄 工藤 陽子

東野 榮夫 山下美樹子

齊藤 仲枝 下島 幸雄

塚田 秀子 高橋 政時

渋谷 一男 小林 虎雄

橋本 豊 池田 園子

滝島 幹夫 鎌瀬 澄雄

尾崎 晃二 岩田 ミキ

峰岸 恒雄 齊藤 勇

飯田橋クリニック腎友会

〈15年以上〉

尾崎 晃二 岩田 ミキ

北村 嘉康 新田 文雄

金沢 七子 高木 甫明

松尾 研治 片岡 強

木村 尚夫 矢沢 輝之

## 辻 喬一郎

## 〈15年以上〉

池田 修久 藤原 寛三

青木 三郎 佐藤 清次

和泉クリニック腎友会1人

〈10年以上〉 渡辺 允

板橋内科板友会(9人)

〈10年以上〉

大沢 洋一 吉村 弘

河内タエ子 田島 フミ

山田 陽子 榎本 幹夫

市村 正樹 太田 広美

〈15年以上〉 中山 好雄

今尾医院腎友会(2人)

〈10年以上〉

茂山チエ子 竹田 清志

入谷クリニック腎友会(2人)

〈10年以上〉

芦崎サツ子 古徳 隆義

上野病院しのばず会(43人)

〈10年以上〉

鈴木登代子 岩田香代子

浜野 広平 毛利 芳江

森下 博之 長谷川 守

## 社 喬一郎

## 〈15年以上〉

安部 陸男 福岡 清孝

山田スズエ 佐川 末吉

伏間 重夫 篠原 活人

松山 栄子 柳沢 幸子

大野 優光 武井タケ乃

山本 広光 日暮 淳二

和田 恭昇 瀬川 光男

渡辺 正彦 桑野 俊明

〈15年以上〉

木村 妙子 島津 三郎

北村 史郎 清本 貞姫

服部 善之

大田病院腎友会(4人)

〈10年以上〉

中野目清子 荻原広次郎

山本 君子

〈15年以上〉 森谷助五郎

大橋クリニック友の会(9人)

〈10年以上〉

矢田 忠 本間 正良

村上善三郎 荒田 長康

高橋 輝義 太田 慶彦

## 奈良弥恵子

## 〈10年以上〉

岩倉ユキコ 山田とみ子

正木テル子 近藤きよこ

佐藤 利吉 荒井富士野

田辺 文子 夏井 利男

串崎 弘忠 外山 泰弘

長沢 洋子 仲江 末彦

長谷川定雄 石井喜美子

森田 信一 大川 久子

治村 律子 沼上 洋一

白井 忍 榎 重次

太原 和子 竹内 順子

山崎 京子

〈15年以上〉 野尻真理子

嬉泉病院ニレ友の会(58人)

〈10年以上〉

山崎 静子 黒田 重一

後藤 和作 三橋 義明

村田 隆雄 安達 文子

平賀登志子 津田 秋海

飯塚 正彦 久保 勝利

関 孝子 南 しず

倉橋富三子 石川 勇吉

## 鈴木 則男

## 〈10年以上〉

鈴木 京子 有沢 登

佐々木エミ子 吉田 敏枝

柳瀬 昌子 小島喜久雄

小田 洋子 遠藤 良男

米井八重子 鬼沢 和子

田口 作次 古川すず子

若杉 節子 田口 義親

松尾キヨ子 吉田 登

山田 猛 安住 富

田中 俎 田嶋 武

時田 豊 塚田 総子

荒川 和泉 鈴木 二男

川久保嘉郎 豊田 敏夫

田口 秀夫

〈15年以上〉 高橋三千子

北病院腎友会(17人)

〈10年以上〉

秋山 美穂 須藤 喜子

岸 富美子 鈴木 勇

土光 光枝 藤村 健夫

金子 昇一 大貫あや子

山中 光子 井田 初江

## 青木 松則

## 阿部 純子

山口 イネ

中田 青攻

榎山 洋子

早坂 愛子

熊崎 美代

有沢 登

吉田 敏枝

小島喜久雄

遠藤 良男

鬼沢 和子

古川すず子

田口 義親

吉田 登

安住 富

田嶋 武

塚田 総子

鈴木 二男

豊田 敏夫

須藤 喜子

鈴木 勇

藤村 健夫

大貫あや子

井田 初江

堀 哲男

大倉 明美 目黒 光春  
斉藤 すみ 橋部 邦久  
高橋 礼子

北多摩病院腎友会(16人)  
(10年以上)

相馬 未一 小玉 敏一  
浜松 秀通 松代 福仁  
栗田 衛 新家 太郎  
常木 静枝 藤田八重子  
田代美代子 石田美弥子  
近藤仲次郎 伊東 陽一  
長谷川 茂 高橋 冷子  
菅 喜真

(15年以上) 高沢 昭夫  
吉祥寺クリニック腎友会 (7人)

(10年以上)  
矢崎三枝子 沼田 愛子  
篠 高代子 大沢 延好  
長尾 春一 牧山 幸子  
志垣 良子

杏林腎友会(5人)  
(10年以上)  
清水 ふじ 須藤 チヨ  
小泉 左内 土堂美佐雄  
(15年以上) 磯野由紀子  
国分寺南口クリニック観光会 (3人)

(10年以上)  
板垣 幸子 馬場富砂子

(15年以上) 古高 英子  
国立王子病院腎友会(6人)  
(10年以上)  
山本 源一 藤野 薫  
厚沢 周介 布藤 実

(15年以上)  
秋山 隆保 小川吉次郎  
三和会(4人)  
(10年以上)  
袖山 静江 若狭 栄  
小野 信子 佐藤 洋子  
三軒茶屋病院腎友会(72人)  
(10年以上)  
雨宮 亀良 坂田恵美子  
氏家 良 船木 忠  
矢崎 源司 中広 孝  
西村 定男 西村美知子  
小島 洋子 奥山 孝  
片山 金作 佐宮谷嘉義  
里山 保 関口佐都子  
高木了サ子 高山 薫  
西村 喜寛 高 宗調  
児玉 忠良 栄 勉  
坂本 光枝 白井 淑子  
日塚 昭一 上林 清次  
阿部シマ子 石田恵美子  
石塚 洋一 窪田 一恵  
長谷川博行 花輪マサ子  
三ツ木 脩 鈴木 明  
富岡 靖子 木下 恵子

木村 ミヨ 佐藤 頼子  
大内 ウタ 大塚 一樹  
小栗ソノ子 川崎 隆利  
北上 清江 阿部 元  
石川 みさ 金井 弘  
玉井 尚則 坪井 文夫  
永井 由己 平井 啓造  
広橋 治子 星 昇治  
真栄田初子 三田寺エイ子  
山口 照雄 西岡 信久  
中島ヨシ子 西沢みえ子  
木村恵美子 小林千恵子  
佐藤 恒雄 恩田 朝郎  
川田 史郎 秋庭 啓代  
池上 勝二 石川美穂子  
石沢 浩一 村田クニ子  
森田 重樹 徳永 雄二  
小川 政男 榊原 顕宣  
大浪 利子

(15年以上) 市川 啓治  
築垣内科ひまわり会(3人)  
(10年以上)  
石田 定則 大塚金次郎  
平本 久江  
昭和大学病院百合の会(2人)  
(10年以上)  
横尾 恒男 神 和子  
松和患者会西新宿(25人)  
(10年以上)  
和田 孝男 岡田 貴史

斉藤 利男 青砥ミチ子  
水垂 登 坪井 芳郎  
山田 正夫 堀口 竹子  
梅垣クニエ 中野 玲子  
小山 久子 加藤 正道  
野沢 純一 木下 幸夫  
藤井 孝祐 伊藤 貞夫  
浜本 嘉信 佐藤 せい  
桜井 清司 糸賀 久夫  
(15年以上)  
藤本三枝子 肥沼 一臣  
伊藤 勲 中村 茂夫  
三浦 礼子  
松和患者会四ツ谷支部(23人)  
(10年以上)  
大久保昭二 和田 孝男  
渡辺 一富 三谷 謙一  
奥田 健二 王 曹祥  
早坂喜久江 宇田川恵三  
赤池 四良 佐野 久雄  
峯島 秀吉 中沢 弘  
田口 又也 三沢 文雄  
前沢 浩 野田 孝

(15年以上)  
岡 正博 田中 茂夫  
網島 好治 秋山 幸則  
片倉 茂 田中 克人  
井田 薫  
松和患者会・目白クリニック (11人)

(10年以上)  
塚本 礼子 石毛長次郎  
藤本 蓉子 中根 義哲  
福岡 辰郎 壺屋 倍弘  
野田 清志 沼田 正宣  
関 弘行  
(15年以上)  
井田 弘之  
新小岩クリニック友の会 (2人)  
(10年以上)  
仙波 雪子 鈴木 恵子  
慈秀病院若菜会(16人)  
(10年以上)  
広瀬 勉子 中條 一成  
小川 康利 田中 一夫

(10年以上)  
木村 ミヨ 佐藤 頼子  
大内 ウタ 大塚 一樹  
小栗ソノ子 川崎 隆利  
北上 清江 阿部 元  
石川 みさ 金井 弘  
玉井 尚則 坪井 文夫  
永井 由己 平井 啓造  
広橋 治子 星 昇治  
真栄田初子 三田寺エイ子  
山口 照雄 西岡 信久  
中島ヨシ子 西沢みえ子  
木村恵美子 小林千恵子  
佐藤 恒雄 恩田 朝郎  
川田 史郎 秋庭 啓代  
池上 勝二 石川美穂子  
石沢 浩一 村田クニ子  
森田 重樹 徳永 雄二  
小川 政男 榊原 顕宣  
大浪 利子

(10年以上)  
木村 ミヨ 佐藤 頼子  
大内 ウタ 大塚 一樹  
小栗ソノ子 川崎 隆利  
北上 清江 阿部 元  
石川 みさ 金井 弘  
玉井 尚則 坪井 文夫  
永井 由己 平井 啓造  
広橋 治子 星 昇治  
真栄田初子 三田寺エイ子  
山口 照雄 西岡 信久  
中島ヨシ子 西沢みえ子  
木村恵美子 小林千恵子  
佐藤 恒雄 恩田 朝郎  
川田 史郎 秋庭 啓代  
池上 勝二 石川美穂子  
石沢 浩一 村田クニ子  
森田 重樹 徳永 雄二  
小川 政男 榊原 顕宣  
大浪 利子

- 大木 松枝 新田 順一 森 義昭 小林 義一  
 齋藤 保雄 藤井 真 安東 よう 大石 正利  
 萩原 明 小川 嗣雄 滝沢 進 富岡美佐子  
 天野 寿一 内田 豊幸 谷 由利 石川 貴子  
 相川 俊夫 林田 洋子 和田 通保 安藤 浩次  
 城南クリニック腎友会(7人)  
 (10年以上)  
 橋本 輝子 井沢 良雄 大場 光伴 小越 允子  
 神保 雅彦 齊藤 広明 白川 栄吾 齊藤 高広  
 土田 和宏 澤田 順子 石井 正俊 青木美童子  
 (15年以上) 渡辺ヨネ子 中山 富子 中山 英次  
 腎研友の会(18人) 山田佐知子 酒井 静子  
 (10年以上) 須藤 君子 小川 忠光  
 牧 正光 黒井英津子  
 阿部多恵子 高崎 豊彦  
 岡本 暁 田中 彰良  
 星野ミチヨ  
 すみれ腎友会(2人)  
 (10年以上) 高島はるみ  
 (15年以上) 紙谷 清  
 すずらん腎友会(12人)  
 (10年以上)  
 桜井 久男 松田 弘  
 小谷美恵子 猪瀬恵美子  
 河田マサヨ 堀江 幸保  
 北爪美佐子 井野 丕基  
 阿部 久芳  
 (15年以上)  
 山本 知威 柘上 達幸  
 鈴木 洋子  
 高松病院患者会(3人)
- (10年以上)  
 田中 実 平子 浩子  
 秋田 静江  
 竹口病院腎友会(1人)  
 (10年以上) 瀬戸谷秀明  
 立川共済病院腎友会(1人)  
 (10年以上) 大村 昭雄  
 立川第一相互病院腎友会  
 (6人)  
 (10年以上)  
 印田勘次郎 奥野い久代  
 竹中 貞昭 北沢 昇  
 (15年)  
 猪俣美智男 押木 春子  
 調布病院腎友会(30人)  
 (10年以上)  
 小針 五郎 古橋 清喜  
 小滝 幸子 長谷 喜策  
 駒子 茂 高野きみ子  
 前島美智子 柳沢 和子  
 福士 正昭 高木 祥孝  
 三谷 興基 江野沢俊明  
 石井久美子 佐々木利通  
 前田 昌子 田中 加男  
 吉田 カヨ 神尾 孝治  
 二石 一周 小林幸三郎  
 永島 連 鈴木 菊江  
 井口 嘉春 坂野一寿  
 風間 伸行 下山 仙昌  
 相田 三郎 中村 英蔵  
 (15年以上)  
 平野 博子 松田 元一  
 調布東山病院腎友会(3人)  
 (10年以上)  
 山田 幸夫 武富 正治  
 (15年以上) 野島 君枝  
 月島サマリア腎友会(27人)  
 (10年以上)  
 安田 綾子 山口千代子  
 浅倉 守 山本やす子  
 品川 正義 小川 昭男  
 力丸 京子 小塚 昌子  
 保田 シゲ 宮崎 保子  
 高橋 明雄 河津 建一  
 清水 泰孝 磯崎 英世  
 石田圭基雄 三宅 雅夫  
 尾関 良夫 川の上 求  
 長崎 八良 田崎 芳江  
 吉田 欣弥 石川 順夫  
 遠藤 勉 米道 辰夫  
 (15年以上)  
 新村 健 羽賀 啓之  
 山上 政和  
 東京共済病院腎友会(4人)  
 (10年以上)  
 坂下 八司 坂口 英雄  
 飯野喜代志  
 (15年以上) 庄司 功  
 中島病院腎友会(4人)  
 (10年以上)  
 深野 光弘 高塚 和雄  
 内田 福次 田中 俊郎  
 中野クリニック患者会(15人)  
 (10年以上)  
 村井 靖治 小林 辰夫  
 藤原千鶴子 大島寿和子  
 加藤 幸子 小島婦佐代  
 和田静洋江 広見 末子  
 (15年)  
 坂井 和江 豊田 新治  
 遠藤 英子 篠原 栄一  
 吉島 絃子 岩橋 孝子  
 沢田 彰  
 長原三和クリニック腎友会  
 (3人)  
 (10年以上)  
 及川 正雄 平田 篤胤  
 谷津 吉夫  
 西新井病院腎友の会(20人)  
 (10年以上)  
 村山 栄一 小林 かつ  
 西 和男 竹川 和明  
 大橋 義弘 山崎 正子  
 乙益 峯隆 佐野 洋子  
 島 秀明 中村 久治  
 馬場 政雄 木村 進  
 仲田 民代 綾部 秀雄  
 星 幸治 本橋 繁  
 及川 ハル 齊藤 英雄  
 (15年以上)
- 人工腎臓虎の門高津会(39人)  
 (10年以上)  
 内田 正平 小田切ふさえ  
 土一万次郎 市橋 唱子  
 田井 保孝 瓦田 東  
 木住野恵美子 小関 昌子  
 高橋 力世 青樹 茂雄

高橋勇二郎 鎌田 吉郎  
西池袋黎明会(2人)

(10年以上) 大野 康年  
(15年以上) 秋山 順子  
西クリニック腎友会(2人)

(10年以上)

町井 博行 藤森いく子  
日伸ビルクリニック腎友会

(5人)

(10年以上)

飯塚 昭三 関口 栄司  
成田美恵子 武井のり子

(15年以上) 丹羽 俊男  
拜島三井クリニック腎友会

(9人)

(10年以上)

浅見 昭子 藤橋 サダ  
羽村 正 今市 純夫

木住野しのぶ 塩野智枝子  
安西一夫 大館 康男

平田 達也

東池袋サンシャイン会(17人)

(10年以上)

百海 茂 小林 スミ  
山口 欽也 内藤 実

安原 毅 藤元 是行  
入口 成子 出牛キミノ

山田 保信 大智 義之  
荻野 宏元 高城 文江

伊藤八重子

(15年以上)

宇田川良男 鈴木 朗  
原 建治良 牛岡 貢

東神田クリニック腎友会

(5人)

(10年以上)

鈴木 サダ 都築 邦江  
十文字七郎 小島 啓司

八木 節子

東高円寺フェニックス会

(28人)

(10年以上)

高倉 浩 松井みどり  
佐藤 貞男 田村正次郎

大森 輝秋 木村まさる  
吉野 公祥 岡田 優

前田 広 細沼 清  
富田ミツ子 上野 正子

今井 孝之 山口きみ子  
青木 定子 坂本美知子

川田 末雄 佐藤 保夫  
原 勝郎 松本 裕

(15年以上)

古谷 弘義 在原 文雄  
中安 恵子 山本 勝子

豊田 隆夫 一ノ清明  
生間 正幸 森 茂昭

豊生会(21人)

(10年以上)

小島喜美江 小松松良子

益田 久栄 先崎 恵子  
伊藤 波江 岡村 淳子

八尾 元美 青柳しほ子  
佐々木昭典 吉川 英治

新田 照子 酒井 清和  
青柳 愛子 大沢富美子

久保 貞夫 柳下ナル子  
原山 貞夫 山本 忠

吉田 好男 加藤 英雄  
逸見 澄

南千住病院河童会(5人)

(5人以上)

小宮 勝雄 保科徳三郎  
中村美枝子 刀根信一郎

矢口 裕一

南多摩病院のぼら会(7人)

(10年以上)

谷 初五郎 江部 春治  
登坂恵一郎 山口登美江

峰尾 好子 秋富富美子  
三の輪病院腎友会(2人)

(10年以上)

堀越 進 梅原 卓  
森山病院友の会(2人)

(10年以上)

渡辺ひさ枝 青木 チエ  
大和病院透析友の会(4人)

渡辺 正昭 中村 幹蔵

奥田とめ子

(15年以上) 佐藤 カツ  
代々木病院腎友会(14人)

(10年以上)

大亦 ミエ 高木 克明  
山浦 正彦 藤岡 宏子

猪瀬あや子 芳賀 房夫  
藤江 廣 井口 恵子

小河原大夫 関 弘明  
佐藤智互美

(15年以上)

栗原 勇 森 悠一郎  
山崎 雅和

西園クリニック腎友会(4人)

(10年以上)

柳橋 正敏 柳沼 カマ  
三任 一郎 大滝 昌利

個人会員(65人)

(10年以上)

橋本 幸一 渡辺 猛  
石原 忠敏 釜原 共和

中尾 利美 吉村 栄一  
城田 隆治 菅原 辰夫

安達 陽子 生井 克子  
井口かつみ 大井 ヨシ

大熊 一恵 大西 徳忠  
荻野とき枝 小国トヨ子

長田 廣子 小沢 和子  
加島 憲一 川北 茂子

神沢 秀 菊地 克子  
北村きくえ 久保 輝之

埼玉真智子 池田 武彦  
坂井 昭子 佐藤 智春

佐藤 亮子 笹川 浩  
塩谷 武 篠原 泉

藤崎 久子 島田 勝  
杉本 忠行 高橋 鈴子

田沢 利幸 田中 弘子  
田中美乃る 辻 功

天明千重子 中原 実  
中條 信 荻原 道子

久松一義武 菱沼 武志  
星野由美子 前田 啓子

松原 清代 松本あき子  
皆川 倫子 南 美津子

森藤 久枝 山口富士雄  
山崎ふみ子 山寺 範枝

吉松 滋子

(15年以上)

菅野雄一郎 岩根 史枝  
高橋 利江 大浜 恭子

芳賀久美子 中村 和子  
山田 誠 堀江紀久雄

(順不同、敬称略)



## 編集後記

十年ひと昔という言葉があるが現代社会の流れの速さからすれば三年もひと昔ともいえるだろう。

十五年前には私の腎臓もまだ一般人並みに働いていたし、私自身仕事に追われる毎日だった。日々起る社会的なできごとにも自分の生活とは切り離された評論家的な意見をもつにすぎなかった。

八年前、私が透析を始めたときには健保の適用、マル障制度が確立しており、収入の激減した私にも賛成をしなければならぬか生きていけると知ったとき、これらの制度を何とありがたいと思つたとか。

多くの仲間と知りあつた今では他人の気持ちを考えて、様々なできごとにも腹の底から憤り、喜べるようになった。こうして生きている実感のある毎日を送っている。私にこんな生き方を教えてくれた先達に感謝してやまない。

(井上 慶典)

十周年の時は「あゆみ」を記念

として発行しました。そして、今度十五周年には東腎協の特別号としての記念誌にもこうして編集委員の一員でかかわることができました。

あと五年たつと二十周年ですが、今の気分は元気でいて、また、相も変らぬ文章力でも何かの形で記念誌にかかわることができているのではないかと思っています。透析患者も十五年も過ぎるといろいろな症状が出てくるので、ちよつとそれまで生きるのは無理かなという気持ちもあります。

それにしても、毎日毎日が飛ぶように過ぎていって、とても死を見つめて、自分の生を充実させるなどという生き方とは縁遠い日々を送っています。

もし、あと残り少ない日々なら、癌の病者の方とは比較になりませんが、もう少しきちんとした日常を送りたいものです。

(木村 妙子)

編集は時間に追われつらいこともあったが、編集会議、インタビューなど楽しい作業であった。

インタビューでは二人の方を訪問したが、十年ぐら前に東腎協

訪問でインタビューをして以来、初めてと言つてもよいと思う。

人に質問をして答えてもらう作業の難しさを感じた。相手の言いたいことを聞きとること、これは日常生活にも通じることであるが、この経験によつてちよつぱり向上したように思う。

いままでも自分の病院(腎研クリニック)で会報を出したりして、一応編集と名の付く作業はしていたが、今回のように編集会議をしつかりやりながら一つの機関誌を作っていくこと、みんなで討論しながら物事を進めること、内容は別として、その過程に素晴らしい発見があった。(草間 和男)

元来、私は話下手で、又、文章を書くなどということは考えてもいなかったが、仕事の経験を生かしたいとの思いで編集委員を務めることになりました。

今年は、東腎協協成十五周年に当たり、機関誌も特別号として発行をすることが決まり、その一つに透析十年以上の人を訪ね、記事にするという新聞記者並の事を行いました。未だかつて、こういう経験はないので、最初は躊躇しま

したが、なんとか無事に取材を終え、文にまとめることができた。実感として私は、その人の話の内容から長所を引き出す難しさや、いろいろな考え、意見を聞けるおもしろさを身を感じた。

今後、積極的に多数の人と会い、多くの話を聞き、数々の経験を重ね、努力をすることによって、人生勉強の一つの糧になれば幸いと思うものである。

(鈴木 澄雄)

東腎協十五周年記念特集号ができました。お読みになった感想はいかがですか。

「たえこのひとりごと」で本村さんが書いているようにこの特集号を出す為に五人の編集委員が真剣になって話し合い、取材し、苦勞しながら作りあげました。

十五年の歴史の中には、いろいろな問題があり、一つひとつを運々とした歩みであっても全腎協や他の難病団体の仲間などと運動を進め、解決、前進してきました。皆さんの率直な感想を事務局へぜひお寄せ下さい。(加藤 茂)